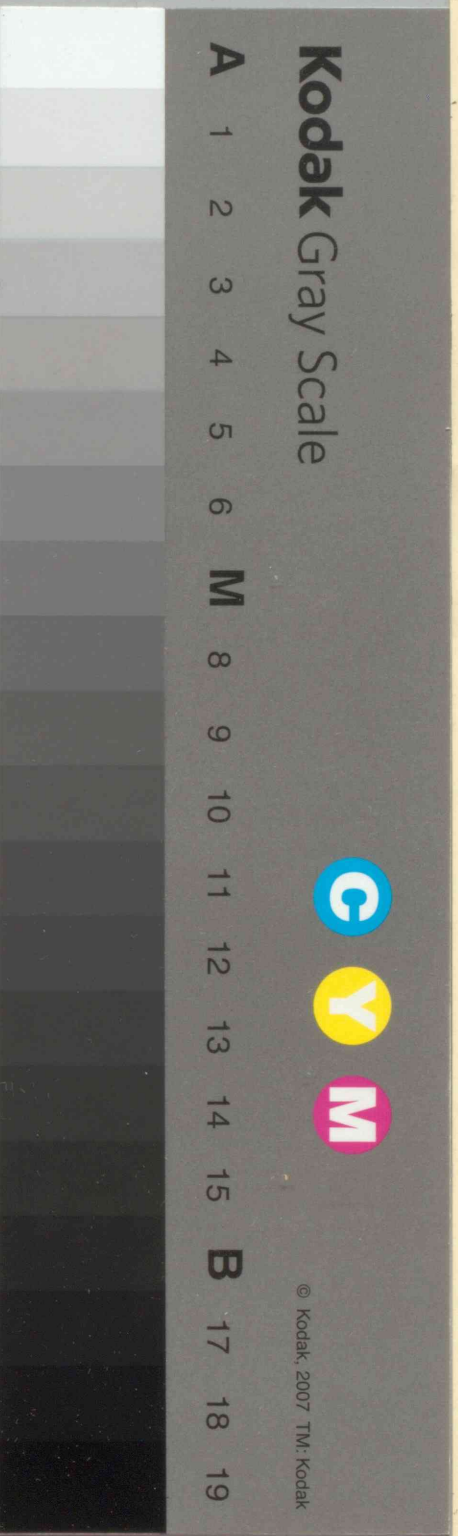
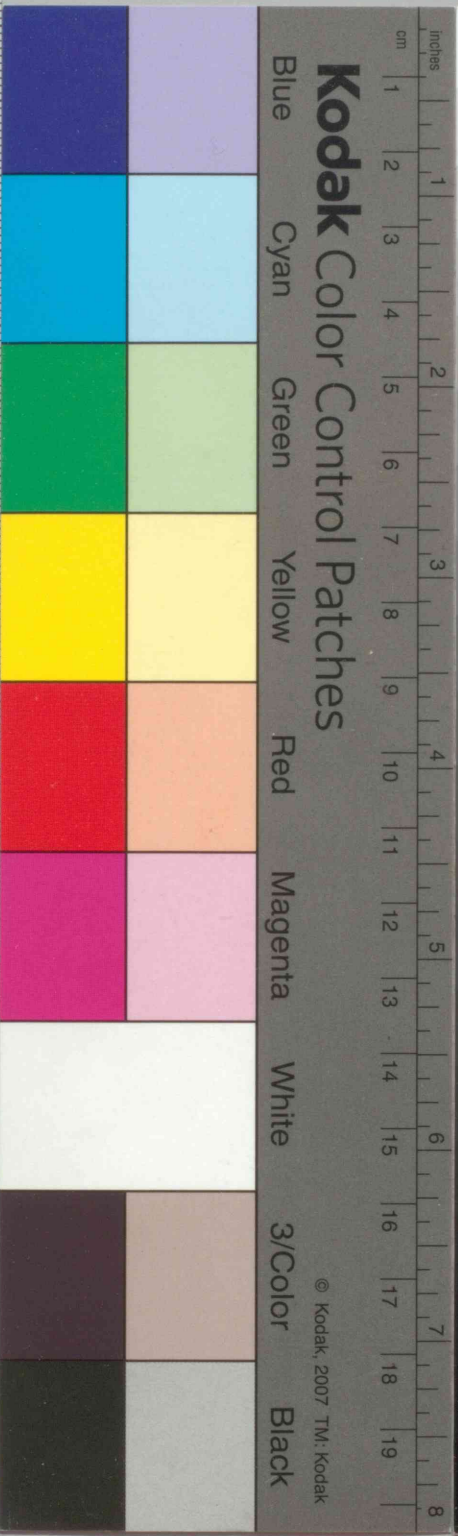


大正女子國文讀本

第二修正版

卷五

375.9  
H019  
資料室



42201  
教科書文庫  
4  
810  
42-1925  
20003  
301736



保科存一編



女子國文讀本



東京 會社 育英書院 發行

大正女子國文讀本 卷五

目次

一	國體の精華……………	佐々木高行……………	一
二	醍醐の花見……………	笹川臨風……………	五
三	雨中小景……………	北原白秋……………	二
四	峠の茶屋……………	夏目漱石……………	三
五	松花江の夕……………	田山花袋……………	六
六	オルレ안의少女……………	中内蝶二……………	三
七	ランスの戦場……………	下田將美……………	三
八	蜂が團子をこしらへる話その一寺田寅彦……………	四	四

目次

九 蜂が團子をこしらへる話 その二…………… 四五

一〇 小蛇の疵…………… 新井白石…………… 五

一一 浮島が原の對面…………… (義經記)…………… 五

一二 大井川…………… 淺井了意…………… 五

一三 舟路…………… 島崎藤村…………… 六

一四 燕…………… 天野藤男…………… 六

一五 綠蔭閑話…………… 相馬御風…………… 七

一六 信濃路の旅 その一…………… 正岡常規…………… 七

一七 信濃路の旅 その二………………………… 九

一八 村岡局…………… (日本の婦人)…………… 七

一九 罫り…………… 三木露風…………… 六

二〇 夏の草花…………… 三宅花圃…………… 一〇八

二一 水あそび…………… 徳富蘆花…………… 一三

二二 蚊やり火………………………… 一〇

二三 風と露…………… 三好學…………… 一三

一 風の音………………………… 一三

二 露の玉………………………… 一五

二四 夕陽の美…………… 高山林次郎…………… 一七

二五 空行く雁…………… (曾我物語)…………… 一八

二六 旅にある友へ…………… 樋口一葉…………… 一六

二七 唯一の姿…………… 水谷まさる…………… 一四〇

二八 世界の歌枕…………… 上田敏…………… 一四八



# 大正女子國文讀本 卷五

## 一 國體の精華

邦域異ならんには、風氣も亦自ら異なるべく、風氣異ならんには政體も亦隨ひて異なるべし。（この上は任意的な事柄である）

されば宇内に國を立つるもの、其の政體各、さまざまにして、一樣ならざること、固より言を俟たざるも、今その大要を取りすべし。いはば、立君の國と民主の國との二つを出でざるべし。而して立君の政必ずしも民主の治に劣れりとせず、民主の治必ずしも立君の政に優れりとせず。

故に立君の政をもて民主の治に代ふべからず、民主の治をもて立君の政に代ふべからず。たゞ其の建國の體を顧み、その本と末とをよく照らし合はせて、後々の國是を計らんこそ必要なるべけれ。按ふに民主の治にして純粹なるものは、かの合衆國なるべく、立君の政にして至醇なるものは、我が大日本帝國なるべし。まして我が帝國の君位は、其の基するところ甚だ遠く、下よりおし戴きまつりて即け奉れるにあらぬをや。はじめ皇祖、その皇孫に此の國を委ねて宣りたまはく、この豊葦原の中つ國は、我が子孫のつぎく知らさん國なり」と。又神器を授けて宣り給はく、これを視ること、なほ我が前に齋くが如く、同床共殿にして仕へまつ

るべし。天津日嗣の隆ならんこと、天壤と窮りなからん」と。あ、皇統の淵源と帝業の基礎とは、全く此の大詔に於てさだまれるなり。

斯くおごそかに統を垂れ極を立て給ひたれば、神武天皇高御座に即かせ給ひし以來も、既に御代は百二十餘代、年は二千五百餘年の久しきに及び、一系の皇統は連綿として絶ゆる時なく、君臣の秩序は井然として紊れしことなし。げに皇祖の大詔は、ことば約に、旨廣く、萬古不易なるものになん。されば明治天皇は、明治の二十二年に帝國憲法を發布せさせたまひて皇祖皇宗の遺訓をついで、大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す」とぞ宣り給ひける。この古今一貫な

る歴史の精粹は、高く聳えて芙蓉峰と顯はれ、廣く湛へて琵琶湖と彰はれたり。恩澤上に積み士氣下に振ひ、未だ嘗て一度も外侮を受けし事なし。あゝ、盛なるかな。これ誠に世界無比の國體なるが故にこそ。

抑、源泉清からざれば、百里の長流もつひに澄むべき期なし。砂上に金殿玉樓を構へんよりも、巖上に茅屋竹縁を築かんこそ、堅牢にして安穩ならめ。智をもて王たるものは、一旦その智失すれば、則ち其の身も亦亡びん。力をもて國を立つるものは、一朝その力衰ふれば、やがて其の國も亦衰へんあゝ、是等の状態は萬國史乘に於て常に散見するところならずや。古賢曰く、盡く書を信ぜば書無きに如かず」と。史

古賢  
孟子をさす

佐々木高行  
舊高知藩士。  
侯爵。樞密顧問官となり明治四十三年薨八十一歳

醍醐  
山城國宇治郡にある。京都の東南。秀吉の花見は慶長三年三月十九日殿下豊臣秀吉。關白であつたから殿下といふ若君秀頼

を讀まんもの、眼識を尙ふこと既に久し。我を明かにして彼を顧みば、國體の精華それ孰れをか優れりとせん。

(佐々木高行)

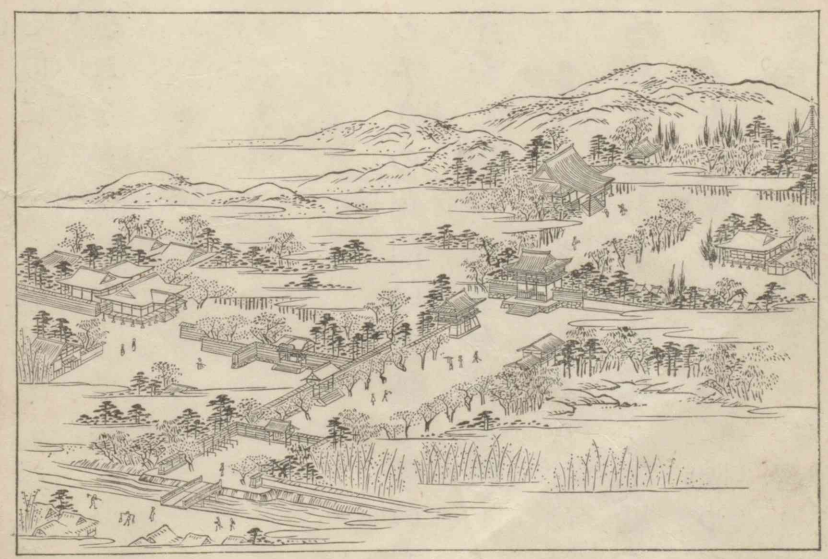
## 二 醍醐の花見

あるほどの寺々の名花、ところ／＼の花園、いづれも道の左右に埒を廻らし、五彩の色華やかに緞子の幕を打ち、殿下には若君以下、上臈衆を従へ、歩行にてゆるやかに歩を運ばせられる。花は今を眞盛り、梢も枝もたわゝに咲揃うて、風あらば散らうとする。五重の塔の朱は、常磐の松杉に映つて、谷川の水は瀨に玉を轉ばす。幽かな韻は風なきに起り、山

増田少將  
名は長盛。秀吉の臣

路悠々として寂しい趣が身に逼る。星霜此に幾百年、不斷の露にぬれそぼちて、苔蒸したる石橋を渡り行く。と、左の方に古りたる一字の堂がある。増田少將こゝを便りとして茶屋をしつろひ、殿下に衣服を進め参らす。「よい手前ぢや。」

下 醒 醐 繪 圖



と殿下には大のよい御機嫌、これより上は花見山とて、千株萬株の花は一様に咲出でて、谷の彼方此方には、一面に花の雲がある。御伴のうちにて、風雅の志あるものは、

聞くならく醒醐は花の世界  
見きたれば此處は雪の乾坤  
と口吟めば、又

天が下残らぬ花のさかりには  
山より山や風にはほふらむ

と詠むものがある。十丈の巖が峙つ下に、ちとばかり平かな所があつて、鬱然た

聞くならく云々  
此の時御伴を介といふ女房の句  
天が下云々  
同じく御伴をウツスといふ女房の作

新莊雜齋  
新莊直頼の弟  
直壽、雜齋は  
其の號、秀吉  
の臣

前田玄以法  
印  
名は宗尙、豊  
臣家五奉行の  
一人  
北政所  
關白の妻の  
稱、こゝは秀  
吉の正室淺野  
氏

る老木幾千本となく茂り合ひ、日の光を漏らさぬ。此處に  
は新莊雜齋、佻しい茶屋を建てて御茶を奉る。小川土佐守  
が營みたる茶屋、屋根は茅にて葺き、垣は葎もて結び、粗末な  
る畳を敷き、幕屏風をまはす。九尺四面の萱葺ける辻堂に、  
荷なひ茶屋を置き、てくる坊の上手、操の名人が、さまざまの  
藝をつくせば、やんやくの聲を絶たぬ。

土佐守の茶屋より十五六町も上りたる處に、前田玄以法印  
茶屋を營み、殿下御父子の御座所、北政所の宿坊、局々の休息  
所、行水所をあまたこしらへ、此處にて行水を進め参らす。  
一風呂さつと浴び給ひて後、殿下は奉れる御膳を快く食う  
べ給ふ。此の階の上には町屋を作り、さまざまの商ひ品を

長東大輔  
名は正家、五  
奉行の一、關  
が原の役、東軍  
に遇られて自  
殺した

御牧勘兵衛

秀吉の臣

新莊東玉

雜齋の兄、直

頼の弟、名は

直忠、剃髪し

て東玉とい

ふ。秀吉の臣

並べ、裏には茶屋をさしかけにしつくりふ。東の谷には、眞  
紅の糸もて打ちたる太綱を引渡し、あまたの鈴をつけ、花に  
集ふ鳥を逐ふ。若君の御慰にとて、庭の遣水に小舟を作り、  
人形を載せて流す。巖に當りて人形の驚き騒ぐ風情は、唯  
まことの人かとはかり疑はれた。長東大輔の茶屋では、馳  
走を捧げ、政所を始め局々は、一様に装束をかへさせられる。  
御牧勘兵衛の茶屋、新莊東玉の茶屋を過ぎ給ふに、よしあり  
げな茶屋ありて、垣は柴、編戸は竹、其の店に焼餅ありたるを、  
殿下こゝろよく食うべ給へば、おあしを賜はり候へ。と申し、  
店屋に吊したる瓢箪一つ取りて、腰にしたまへば、その代を  
くだされませ。と申しながら、茶屋の女房二十歳ばかりなる



が二三人、殿下の雙の御手にすがり、其のまゝにて御歸りは  
なりませぬ。おあしをくだされませ、お濟ましく下さりま  
せ。」と笑ひながらに申し上ぐれば、さらば其の算用いたさう  
ぞ、代を取らせうぞ。」と、ずいと茶屋の内に入り給ふと、中では  
酒宴。

「目出たや松の下、千世も幾千代、ちよく。」の祝の小歌で、さし  
つおさへつ、夜も更け行いてから、宿坊への御歸館。

「又來ん秋は紅葉を見に參らうぞ。」との御約束で、三寶院へは  
新知千六百石の御寄附あり、さまざまの下し物を賜はつて、  
一時にときめく榮華は目を驚かすばかりである。

（笹川臨風—淀君）

三寶院  
下醍醐にあつ  
て醍醐寺座主  
の住院  
笹川臨風  
名は種郎  
學士、歴史文  
語の著述が多  
い

三 雨中小景

雨はふる ふる雨の霞がとれ

ひとすぢ煙は 誰のたつぎ

銀鼠よかりゆく 古代紫

その空は城の島 近く横よ

なべてみな あだなりや 海乃面よ

輪をかかは みをすぢ あるいは離れ

—みぐく空泣きわのれりく

その上り あるかなさ ふる雨の結

遠かなる岬よは波も—ふきおこ

北原白秋  
現代の詩人

絹ごし雨の中 あまふ舟ゆたまたゆたふ  
 棹あげくかぢめ採り居る  
 山の麓の蓑と笠 中に、くまろく  
 一心よ彌うつは やすからぬけふのなりけひ  
 きるにても嬉しきは浮きなり若あ  
 雨の中 走りくくよ雲をすかして  
 さ緑よなまぢかる壺のえんは  
 まよふ雨よ思ひ入る 喜よは刻めぬ  
 絶えぬ影せぬ鶴鈴は急をよりに

(北原白秋——白秋詩集)

四 峠の茶屋

おいと聲を掛けたが返事がない。  
 軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立て切つてある。向側  
 は見えない。  
 五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふら  
 りふらりと揺れる。下に駄菓子箱が三つばかりならん  
 で、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。  
 おいと復聲をかける。土間の片隅に寄せてある。白の上に  
 ふくれて居た雞が驚いて眼をさます。くまろくくと騒  
 ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半行程  
 色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてある。幸ひ下は

焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと入つて、床几の上へ腰を卸した。雞は羽搏きをして白から飛下りる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけつこつこと云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。

床几の上には、一升柅程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るの知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に收まる。

しばらくすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。竈に火は燃えてゐる、菓子箱の上に錢が散らばつて居る、線香は暢氣に燻つて居る、どうせ出るにはきまつてゐる。しかし、自分の見世をあけ放しても苦にならないと見える處が、都とは少し違つてゐる。返事がないのに、床几に腰をかけていつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、さぞ御困りでござんしよ。お、大

分お濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましょ。」  
「そこをもう少し焚付けてくれ、ば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」  
と立ちあがりながら、しつくと二聲で雞を追下げる。こここゝと駈出した雌雄は、焦茶色の壘から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛出す。

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか、割拔盆の上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけられて居る。

「御菓子を。」と、今度は雞の踏みつけた胡麻ねちと微塵棒を持つてくる。

婆さんは袖無しの上から禪をかけて、竈の前へうづくまる余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

「生憎今日は、——先刻の雨で何處へか逃げました。」  
折柄竈の中がばちくと鳴つて、赤い火が颯と風を起して

夏目漱石  
名は金之助。  
小説家。大正  
五年歿。五十歳

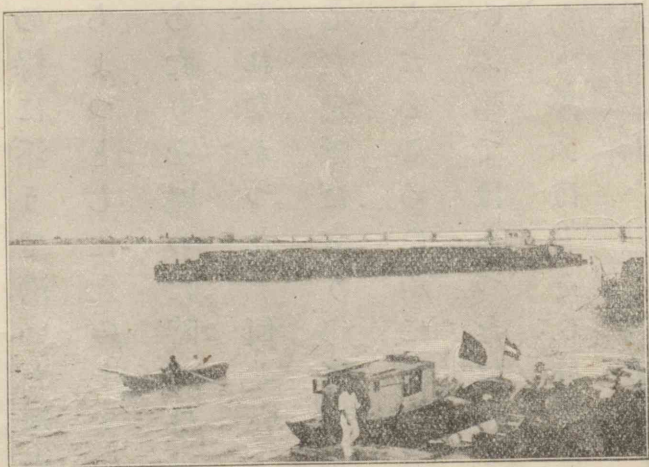
ハルビン  
支那滿洲吉林  
省の西北端に  
在る都市。松  
花江の右岸に  
のそむ

一尺あまり吹出す。  
「さああたり。さぞお寒かる。」  
と云ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに微  
かな痕をまだ板庇にからんで居る。  
(夏目漱石—鶉籠)

五 松花江の夕

次第に兩岸を遠く、舟が中流に浮んだ時には、ハルビンの市  
街が更にはつきりと私の頭の中に描かれて來たやうな氣  
がした。ちやうどその時、彎形をした大きな鐵橋には、長蛇  
のやうな汽車が、轟然として音をあたりに響かせつゝ、通つ  
て行くのが見えた。私たちは、ちつとそれを見詰めた。汽

車は時のまに橋を過ぎて、廣い野の方へと出て行つた  
が、暫く經つた後にも、なほ遠く  
その黒い煙の空に靡くの指  
すことが出來た。  
滑らかな水の面には、午後六時  
すぎの日が明るく美しくさし  
て、をり／＼大きなきはぎの  
ジャンクの帆が私たちの舟を  
掠めて行つた。ジャンクの帆  
の下には、支那人の船頭が二三  
人かたまつて、何か頻りに話してゐた。一人の船頭の横顔



を夕日が思ひ切つて赤く染めた。

向ふの岸に近く、白楊の低い若樹の縁に添うて漕いだ私たちは、やがてそこに舟を捨てた。ちよつとした丘の上ではあつたけれども、その上に立つてあたりを眺めた時には、私は思はず喜の聲を立てずにはゐられなかつた。何といふ廣さだらう、また何といふ荒漠とした光景だらう。何でも支那側では、そこに、その鐵橋に接したところに、新に彼等の市街を建てる計畫をしてゐるといふ事ではあつたけれども、さうした事はいつ實現されるかと思ふほど、それほど、荒漠としてゐた。草は茫々として、異郷の思を私に誘つた。「こゝらは、もう少したつと、ロシヤ人で一杯になるんです。

かれらほどピクニックの好きな人間はありませんからな。あの楊の縁の中に、サモアルを持つて行つたりして、楽しさうにしてゐますからな……。あゝ、いふ所を見ると、どんなにおちぶれても、大きな國民といふやうな氣がしますよ。」N君はあたりを指しつゝ、こんなことを云つた。

川では夕日がすでに消えかけてゐた。それにも拘らず、これから二三人してボートを川に浮べようとしてゐるロシヤの若い娘たちなどがあつた。中流でもオールで水を打たせてゐた。さうした舟が、燕のやうに行つたり來たりしてゐた。舟を此方へ漕戻して來る間、私たちは黙つて相對してゐた。N君にも、かうした異郷にあるさびしさが脈々

田山花袋  
名は祿彌、  
説家、旅行を  
好み紀行文に  
巧みある

シノン城  
フランス國に  
ある市

として胸に上つて來るといふ風であつた。のんきで、刺激  
がなくつていゝなどと云つてはゐるけれども、やはり心は  
遠く内地にあるらしかつた。夕日の影はいつか消えて、茫  
茫とした空氣が靜かに水の上にたゞよひわたつた。溶々  
と流れて片時も止まらない大河の流といふ感じが、ひしと  
私たちの胸を塞ぐやうにした。

(田山花袋)

六 オルレアンの少女

西曆千四百二十九年三月九日の夕陽は西に沈みぬ。シノ  
ン城中の光景は今いかに。満堂の銀燭は煌々として晝を  
欺き、庭中に列なる三百の騎士は肅々として兜の星を輝か

ハイロン  
ドムレミ  
イシエ

チャールス  
佛王チャール  
ス六世の子  
チャールス七世  
(1394-1461)  
ジャンヌ  
ジャンヌダルク  
ドムレミ  
シヤンパーニ  
ユ州、ドイツ  
國境に接する  
所にある  
ランス市  
パリの東々北  
にある當時王  
ヤールスは王  
と稱したけれ  
ど、市の大伽藍  
で宗教的の戴  
冠式を行はな  
かつた  
オルレアン  
首都、パリの  
西南七五哩の  
右岸にある河

す。チャールスは故らに、瑤冠寶位を捨てて、侍衛の諸官と  
服を同じうし、玉座遙かに臣僚の間に交り、以てジャンヌの  
朝するを待てり。ジャンヌは徐に堂に入りて、煌々たる光  
を眩しとも思はず、肅々たる甲士を恐ろしとも思はず、一瞥  
直ちにチャールスを知り、進んで足下に跪いて曰く、仁慈な  
る陛下よ、妾はドムレミ村の賤女ジャンヌにて侍り。在  
天の主、密旨を陛下に傳へんが爲に妾を送りぬ。フランス  
の國王たらん者は即ち陛下なり。何ぞ速かに敵兵を掃蕩  
して、即位の大禮をランス市に行ひ給はざる。願はくは妾  
に、假すに、兵馬の權と一隊の兵士とを以てせよ。妾は直ち  
にオルレアン城に赴き、誓つて英兵を殄滅して、陛下をラン





は誰々ぞ。ランスの大僧正を始として、僧正大法官、樞密院顧問官、其の他數多の鴻儒碩學、何れも難題を心にゑがきて、ジャンヌの到るを今や遅しと待ちかけたり。ジャンヌ既に入りて席に列なるや、博識の聞えある一人の神學博士は、先づ起つて問うて曰く、

「ジャンヌよ、聞けば汝は卑賤なる婦女の身をも顧みず、自ら兵馬の權を握らんことを願ふとか。そは兎も角、英兵を國外に掃蕩せんことは、上帝の神慮なり」といふに至りては、聞棄て難き汝が言なり。果して然らば、神は全能の力を以て、自ら英兵を掃蕩し給ふべきに、之が爲に再び、干戈を動かさしめ給はんとは、實に怪しむべきかぎりならずや。」

「ずや。」

ジャンヌは從容として答へて曰く、

「英兵の侵し來れるは、佛國を占領せんが爲なり。軍敗れざるに、いかでか此の國を退くべき。而して彼を破るべき者も、亦これ兵にあらずや。故に神は、我が兵を救うて利あらしめんと欲し給ふのみ。」

意地悪き一人の僧正は問うて曰く、

「ジャンヌよ、汝は『後園にて、神託を受けたり』と稱す。知ら

ず、天使は如何なる聲にて汝に語りしか。」

ジャンヌはほゝゑみながら答へて曰く、

「卿が聲よりは麗しかりき。」

僧正恥ぢて顔色なし。論理に長けたる一人の博士は、故らにジャンヌを揶揄して曰く、

「ジャンヌよ、汝は果して神を信ぜるか。」

ジャンヌは色をなして答へて曰く、

「卿等が信じ給ふよりは遙かに深し。」

語未だ終らざるに、一人の僧侶は又詰りて曰く、

「ジャンヌよ、汝は猥りに、國難を救ふべき神託を受けたり。」と稱す。然れども只汝が語る所をのみ信じて、俄かに兵馬の權を授けんは、餘りに早計に過ぎたり。果して神託を得たりと云ふ證ありや。」

ジャンヌは笑つて答へて曰く、

「妾は其の證を示さんとて、此の議院には現はれず。卿早く其の證を見んと思はば、疾く妾をオルレ안의城に送れ。妾が『神託を受けたり。』と稱せることの眞偽は、即ち其の結果にあり。願はくは妾に一隊の兵を假して、オルレ안의城に送れ。」

一人の僧侶はジャンヌを苦しめんと欲して、問うて曰く、

「ジャンヌよ、汝は果して文字を知れりや。」

ジャンヌは少しも恥づる色なくして、答へて曰く、

「妾はもとよりAも知らず、Bも知らず、一文不通にて侍り。されど上帝の命じ給ふ言は、卿等が著せる書を讀むより、遙かに價ありと信ず。妾は唯オルレアン城の圍を解き

て、陛下の戴冠式をランスに行ふべき任務あることを知るのみ。



(筆一エリユド) クルダヌンヤジ

堂の碩學高僧、何れも舌を卷いて、其の智囊の測り難きに驚き、遂にジャンヌの言に服せり。

斯くて糺明夜に互り、難問又難問、櫛の齒を引くが如く相次いで至れども、ジャンヌは少しも淀む所なく、其の答辯の明晰なること、誠に快刀の亂麻を斷つが如し。満

三人の貴夫人

チヤリス七世の姑たる及  
のシユリサ  
びイエルサ  
ンム王と公爵  
夫人と、公爵  
レアンと、事  
の三人の妻と

中内蝶二  
文學士、新聞  
記者

糺問の結果は實に意想の外に出でたるを以て、或は妖術を以て愚民を惑はさんとする魔女の族ならんことを恐れ、三人の貴夫人をして、親しくジャンヌが言行を吟味せしめしに、篤實濫順、女性としての操行一つも缺くる所あらざりき。是に於てかジャンヌの名聲は頓に揚り、風評一時に喧しかりき。初は狂女と誹りし者も、全く熱心なる愛國家なる事を知り、眞に國難を救はんとて來りし神の化身なる事を信じぬ。内宮廷に在る百官は勿論、外軍旅に在る將卒に至るまで、皆舉つてジャンヌを敬ふに至れり。

(中内蝶二—世界歴史譚惹安達克)



道の左右は一面の野で、右は獨軍左は聯合軍の陣地であつたのだと、案内者は教へた。

車の走るに従つて、野はどこまでも廣く開けてくる。所々に村落らしい所もあるが、家は悉く崩れ倒れて、住む人は元より見えない。壁をつきぬいた大きな砲弾は、屋根をはね飛ばして何處かに飛んだのであらう。家と云ふ家は死んだ蛙のやうにべたりとなつてゐるか、然らざれば跡形もなく礎だけを残して粉微塵にくだけてゐる。すべての墓石が、砲弾の爲に壞されてゐる墓場もあつた。鐵の牆だけを殘して消失せた教會もあつた。殘された牆にからみついた野薔薇が、一面に白い花をつけて咲いてゐるのが、又なく

物寂しかつた。かうした村落を通りすぎれば、又兩側は廣野である。

野には鐵條網が、戦場のありし頃のありまだありし昔のまゝに縦横無盡に張廻はされてゐる。塹壕もそのまゝになつてゐる。大きな大砲の彈丸もころがつてゐれば、タンクも轉げてゐる。土はすべて砲弾の爲に荒し果されて、白い地膚を現して居るけれども、その白い地膚を縫つて、フランス特有の野草である眞紅な芥子と、黄色い菜の花とが、一面に見える限り咲亂れてゐる。折々は空色に澄んだ矢車草の花も交る。「あのあたりがヒンデンブルク線」と案内人の指す方を見れば、一際濃い色に咲亂れた紅芥子の野を、尾の長いかさぎが地をぬ

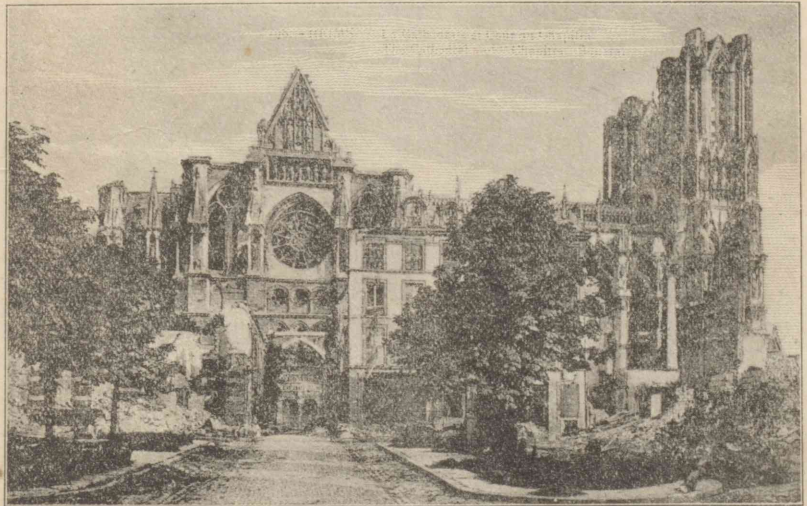
シヤン又

ヒンデンブルク線  
ドイツの將軍  
が布いた戦線

ベリー、オ、  
バック  
ランスの附近  
にある町

うて低く飛んでゐた。ベ  
リー、オ、バックで車を降り  
て、幾度か、争奪の目標とな  
つた當年の激戦地を弔つ  
た。人口四千を算したと  
云ふ町の面影は、そもく  
何處に求め得るのであら  
う。そこには一軒の家も  
なく、雞犬の聲も元より聞  
えぬ。たゞ残れるは荒涼  
落莫たる人間同志の殺傷

ニのモ 院寺のスラたけ受を禍戦



の片身のみである。街の中を流れてゐた立派な運河も、一  
たびドイツ軍の占領する所となつてからは、水は乾されて  
そのまゝの塹壕に利用され、今も猶水の涸れた底の方に、砲  
車やら鐵條網やらが投込まれてゐる。錆付いた砲車も、何  
人かの血を浴び、何人かの生命を奪ひ去つたものなのであ  
らう。  
摺りむけた生々しい人膚を俵ばせるやうな白い土山を上  
つて行くと、成程こゝは兩軍が必死に争奪を試みたのも無  
理はないと思はれるやうな形勝の地である。廣い野は目  
の下に見える。遠く離れたランスの街も指呼することが  
出来る。しかしこの景色は、何と云ふ淋しい落莫たるもの

なのであらう。靜かに遊び群つて居た牛や羊の群は、今何處にあるのか。曾ては此の野に、此の小川のほとりに、若き生命の漲るまゝに遊び戯れた此のほとりの子供たちは、今そもく如何なる運命に陥つて居るのであらうか。母子の間に、兄弟の間に、夫婦の間に、いかに泣いても泣盡せぬやうな悲劇の數々が、こゝで醸された事であらう。見よ、是等すべての悲みと苦みとの過去を、空しき夢と忘れ果てたやうな姿をして、荒れた野と、掘崩した塹壕の白い線とが、冷たく横はつてゐる。……ともすれば佇んで考へ沈まうとする私を引立てるやうに、案内者はどんく先へ進んで行く。小山を登り盡した所には、丁度噴火口でも見るやうな、大き

な、周圍一町にも餘りさうな穴があいてゐた。

それは地雷の跡だと云ふことであつた。此の土の下には、少くとも四千人の兵が、猶現に埋まつて居るのです。と、案内人は砂のぼろく崩れ落ちる大穴の底を指して云つた。私は悲しまうにも悲しみ盡せないやうな迫り來る感情に打たれながら、黙つて白い大きな口を開けてゐる土の色を見つめてゐた。氣がつけば、あたり一面に眞紅な野芥子は、やはりこゝにも咲亂れてゐた。そよとの風にも散果てるやうなはかない風情を示しながら、何の心から此の血のやうな花は荒涼たる戦場の土に咲いてゐるのであらうか。私は默然として其の花の二三輪を摘取つて、手に持つて居

下田將美  
時事新報記者

た戰場案内記の中へ挿んだ。  
山を下りて自動車の待つて居る所まで歸つてくると、道の傍に百姓女のやうな粗末な服をきた女や、裸足で帽子もかぶらぬ貧しい女の子や、男の子が、戰場で拾ひ集めたらしいドイツ兵のヘルメットだの擲弾だのを、青草の上にならべて賣つてゐた。

（下田將美―山上の展望）

八 蜂が團子をこしらへる話 その一

宅の庭の植物は、毎年いゝな害蟲の爲にむごたらしく虐待される。中でも一番ひどくやられるのは薔薇である。羽が黒くて腰の黄色い小さな蜂が、柔い若芽の莖の中に卵

を産みつけると、やがて莖の横腹が豎にはじけて青い色の幼蟲が生れ出る。これが若葉の緑に鈴成りに黒い頭を並べて、驚くべき食慾をもつて、瞬く間にあらゆる葉を食ひ盡してしまふ。去年は、此の翡翠の色をした薔薇の蟲と同種と思はれるのが、つゞじにまでも蔓延した。尤もつゞじのは、色が少し黒ずんで居て、つゞじの葉によく似た色をして居るのが不思議であつた。何とかして此の害蟲を絶滅する方法はないものだらうかと思ふだけで、専門家に聞いて見るでもなく、書物を調べてもなく、つい其の儘にして置くのである。いつか三越の六階で薔薇を見て居たら、それにも、ちゃんと此の蟲がついた儘に、正札をつけてあるのを



發見して驚いた事がある。専門家でもこれを完全に驅除するのは困難だとすると、自分等の手におへぬのは當然かと思はれた。兎に角去年などは、幾株かの薔薇とつゝじを綺麗に坊主にしてしまはれた。枯れるかと思つたら存外枯れもしないで、今年の春の日光を受けると、又正直に若芽を吹出して來た。

今年も亦例の青蟲が出るだらうと思つて、折々氣をつけて見るが、どうしたのか、まだ餘り多くは發生しない。其の代り今年は、これと變つた蟲が非常にたくさん現はれて來た。それは黒い背筋の上に薄いレモン色の房々とした毛束を四つも着け、其の兩脇に走る美しい橙紅色の線が、頭の端で

燃えるやうな朱の色をして、そこから眞黒な長い毛が突出して居る。これが薔薇のみならず、萩にも、どうだんにも、芙蓉にも、夥しくついて居る。これは青蟲ほど旺盛な食欲をもつて居ないらしいが、其の代り、云はゞ少し口のをこつた奴で、薔薇の蒼を選んでは、片はしから食つて行くのである。去年はよく咲いたクリーム色の薔薇も、今年はこの蟲にひどく荒されてしまつた。或日私は庭へ出て、一番毛蟲の多くついた薔薇を見に行つた。そして見當り次第に箸でつまんで處分して居た。すると眞圓く擴がつた薔薇の枝の上に、土色をしたとかげが一疋横はつて居た。ちつとして所謂甲らを干して居るといふ様子であつた。併し恐らく

そんな生せい温おんい享樂きやうらくの爲ではなくてもつとせつばつまつた  
生存せいぞんの權利けんりを主張する爲に、何かを期待して狙つて居たに  
相違ない。時々のそく、這ひ出しては、又ちつとして、意地  
のわるさうな眼を光らせて居る。事によると、これは青蟲  
でも搜して居るのではないかと思はれた、若しさうだとす  
ると有難いわけだと思つた。  
忽ち眼の前に一つの争鬪せうとうの活劇が起つた。同じ薔薇の上  
に何物かを物色ぶつしやくして居た濃褐色の蜂が、突然、殆ど何の理由  
とも分らず、又何等の豫備行爲もなく、いきなり此のとかけ  
の背に飛びか、つた。そして右の後脚の附根と思ふ邊を  
刺したやうに見えた。併しとかげは殆ど何事も起らなか

つたかのやうに、ちつとしたまゝ、身じろき一つしなかつた。  
そして數秒の後に、又のそく、と這ひ出して、一寸位も這つ  
たかと思ふと立止つて、小さな眼を光らせて居た。  
どういふわけで蜂が此のやうな攻撃をしたか、私には少し  
も見當がつかかなかつた。人間ならば商賣敵といふ言葉で、  
容易に説明されるべき行爲の動機が、此の場合、同じ言葉で  
説明されるかどうか、それは全く分らない。

九 蜂が團子をこしらへる話 その二

同じ薔薇の反對の側へ廻つて見ると、其處にも一疋の蜂が  
居た。そして何かしら或仕事をして居るのであつた。そ

れはさつきとかげを攻撃したと同じ蜂かどうか分らないが、兎に角同じ種類のものであつた。廣い葉の上に止つて、前脚で小さな毛蟲らしいものをしつかりつかまへて、それをあの鋭い鋏のやうな嘴でしきりに噛みこなして居た。私が見つけた時には、それがもう殆ど毛蟲だか何だか分らないやうな塊になつて居たが、唯其の圍りから突出た毛束によつて、さう考へられたのである。斷えず噛みながら脚で器用に塊を廻はして行くので、初には多少いびつであつたのが、殆ど完全な球形になつて、もう何處にも毛などの痕跡は見えなくなつてしまつた。廻す拍子に一度危く取落さうとして、やつと取止めた様子は滑稽であつた。蜂はや

インシラ  
impraesentia  
インプレイション

がて此の團子をくはへて飛出さうとしたが、どうしたのか、もう一返他の枝に下りた。人間ならば、ざつと荷物をこしらへて、試みに一寸さげて見たといふやうな體裁であつた。そして又暫く噛んで丸める動作を繰返して居た。からだで拍子をとるやうにして小枝をゆさぶりながら、せつせと働いて居る處は、見るも勇しい健氣なものであつた。澁色をした小さな身體が、<sup>サウカスル</sup>精悍の氣ではち切れさうに見えた。二三分もすると急に飛上つて、一文字に、投げるやうに、隣家の屋根をすれ〜に越して見えなくなつてしまつた。私は毛蟲にかういふ強敵のある事は全く知らなかつたので、<sup>此の</sup>此の<sup>生界の</sup>目前の<sup>の</sup>出來事<sup>の</sup>から、かなり強い印象を受けた。そして

九 蜂が團子をこしらへる話 その二

ソリヤイトル

今更のやうに、自然界のに行はれて居る調節の、複雑で巧妙な事を考へさせられた。此の調節は、蜂の体内に生じて居るもので、外界からの影響を受け、体温を一定に保つて居ることに役立つ。

それから二三日経つて、同じ薔薇で同じやうな蜂が大きな毛蟲を捕へる處を見る事が出来た。いきなり頭の方へ噛み付くと、皮が破れて緑色の汁が玉のやうに吹出した。それを引きずり引きずり、高い葉へ高い葉へと登つて行つた。其の間にも噛みこなす事は休まず續けて居るので、毛蟲の形は段々に消えて、緑が、つた黒色の塊に變りつゝあつた。其の内に一度、蜂は羽をひろげて強く振動させた。恐らく飛上らうとしたのであらうが、蟲の重量は此の蜂の飛揚力以上であつたと見えて、少しも動かなかつた。どうするか

と思つて居ると、その稍長みのある塊をうまく二つに食ひきつて、その片方を丁寧に丸めた後に、それをくはへて前日と同じ方向へ飛んで行つた。残の半分を今に取りに来るのではあるまいかと思つたので、もの十分ほども待つて居た。其の間に全く別の方向から同じやうな蜂が飛んで来て、薔薇の上を暫くあさつて居たが、さつきの團子の残の半分のつい近くまで行つても氣付かないで、其の内どこかへ飛んで行つてしまつた。一二時間もたつて見に行つた時には、毛蟲の半分の塊はもうなくなつて居た。それは何者が持去つたかよくは分らない。併し多くの蜂について、從來知られて居る事實から推して、此の残の半分も、それの

正當な權利者の巢に運ばれたものと思つてもいゝだらう。私は此の蜂の巢を見付けたい、そして此の珍奇な蟲の團子が、其處で如何に處理されるかを知りたいと思つて居る。蟲の行爲はやはり蟲の行爲であつて、人間とは關係のない事である。人として、豈蟲に劣るべけんやといふやうな結論は、今日では全く無意味なことである。それにも拘らず蟲のする事を見て居ると、實に面白い。そして感心するだけで決して腹が立たない。私にはそれだけで十分である。私は人間のする事を見て腹ばかり立てて居る人達に僅かな暇を割いて蟲の世界を見物する事をすゝめたい。

寺田寅彦  
東京帝國大學  
理學部教授  
理學博士

（寺田寅彦—冬彦集）

一〇 小蛇の疵

富商  
河村瑞賢

當時天下に雙なしなどいふ富商の子の、學ぶ友となりぬる事出で來しに、其の子いひしは、我が父なる者の見まゐらせ『必ず天下の大儒ともなり給ふべき御事なり。我が亡兄の娘の候なるに合せまゐらせ、黄金三千兩に求め得し宅地をもて學問の料となして、物學び給ふやうにと、某が心のやうに申せ。』とこそ侍れ。といふ。

我この事を聞きて、御志の程忘るべからず。我むかし或人の申ししことを聞きしに、夏のころ、靈山とかに遊びしものどもの中、池に足ひたし居けるに、小さき蛇の來りて、其の足

の大指をねぶるあるが、忽ちに去りては、また忽ちに来りて舐る。かくするがうちに其の蛇やうくに大きくなりしにや、後には其の大指を呑むばかりになりしかば、腰よりさすがを取出して、刃の方を上になして大指の上にあててまつ。また來りて大指を呑まむとする所をあげざまに刺斬りたれば、うしろ様に飛去るほどに、家にかけて入りて障子をさす。件なひしものども、何事にや。といふほどこそあれ、石走り木僵れて、地震ふこと半時ばかり過ぎてのちに、障子を細目にあけて見けるに、



新井白石

一丈あまりの大蛇の唇の上より頭の方まで、一尺あまり斬られたるが、斃れ死したりといふことなり。その有りや無しやは未だ知らねど、今のたまふことに似たるころのはべるなり。はじめ其の蛇の小さかりしほどは、僅かにさすがをもて刺斬りしところなるが、既に大きくなりしに至つては、一尺あまりの疵とは成りしなり。われいま身貧しく窮りたれば、人知れる者にもあらず。此の身のまゝにて、その亡兄のあとを承継ぎなむには、その疵なほ小さきなるべし。若しのたまふところのごとく、世に知らるべきほどの儒生ともなりなむには、その疵は殊に大きにこそなりぬべけれ。三千兩の黄金をすてて、大疵あらむ儒生と成した

然るべき儒生

黒川某といひ父祖ともに儒者として名のあつた人

父

新井正濟。久留里侯土屋利直の臣

新井白石

名は君美。徳川初期の漢學者徳川家宣に仕へて幕政を輔けた

佐殿

右兵衛佐源頼朝

彌太郎

彌太郎

御曹司

部屋住の公達

の事。こゝは源義經

頭の殿

左馬頭源義朝

池の尼

平清盛の後妻

平頼盛の繼母

伊豆の配所

田方郡蛭が島

伊東

名は祐親

北條

名は時政

奥州

今の陸前・陸中・陸奥・秀衡は陸中磐井郡平泉に居た

てられむことは、謀を得給ひたりともいふべからず。たとひ刺斬るところの小さきなりとも、我もまた疵被らむことを願はず。我かくこそ申したれと答へ給へ。といひたり。後に聞けば、然るべき儒生の、その娘にはあひ具せしなり。此のことも父にておはせし人に語り申しければ、めづらしからぬことなれど、よき喩にもありつるかな。と笑ひ給ひたりき。

(新井白石一折りたく柴の記)

一一 浮島が原の對面

佐殿は善悪に騒がぬ人にておはしけるが、今度はことの外嬉しげにて、さらば、これへおはしまし候へ。見參せむ。と宣

へば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大さによろこび、急ぎ參り給ふ。佐殿つくづく、とこれを御覽じて、まづ涙にむせび給へば、御曹司もともに聲を呑みて泣き給ふ。

互に心のゆくほど泣きて後、佐殿涙をおさへて、さても、頭の殿におくれ奉りて、その後御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて、伊東、北條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向のよしは、幽かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、とりあへず御上り候こと、申しつくしがたく悦び

入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあはする人もなし。平家の討手のぼせばやと思へども、身は一人なり、頼朝自身すゝみ候へば、東國おぼつかなし、代官をのぼせんとすれば、心やすき兄弟もなし、他人をのぼせんとすれば、平家とひとつになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひがたかりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿の後三年の合戦に、御弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を従へ給ひける時の御心も、頼朝が只今の心にいかでかまさるべき。今日より後は魚と

八幡殿  
源義家  
刑部丞  
源義光

はかりか  
はた  
イフキム  
モヨ助  
平ムネキ

水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤を息めむ。と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞしぼられける。これを見て、大名小名たがひの御心おしはかりて、みな袖をぞぬらしける。しばらくありて、御曹司申されけるは、仰のごとく、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらむ。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参りて、十六までかたの如く學問を仕り、さて京都に候ひしが、内々平家方便をつくるよし承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡をたのみ候ひつるが、御旗揚の由承りて、取りあへず馳せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見参に入り候心地してこそ候へ。身

秀衡  
藤原氏。陸奥  
出羽の押領使  
基衡の子

親  
ヨリトモ  
三十四  
ヨリツネ  
三十二  
ヨリトモ  
ヨリトモ  
ヨリトモ



義經記  
作者不詳、足利時代初期の作、源義經の一代を脚色したものである

島田  
駿河國志太郡大井川の左岸

金谷  
遠江國榛原郡大井川の右岸

をば君にまゐらする上は、いかゞ仰に従ひまゐらせては候べき。と申しもあへず、また涙をながし給ひけるこそあはれなれ。さてこそこの御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ

(義經記)

一二 大井川

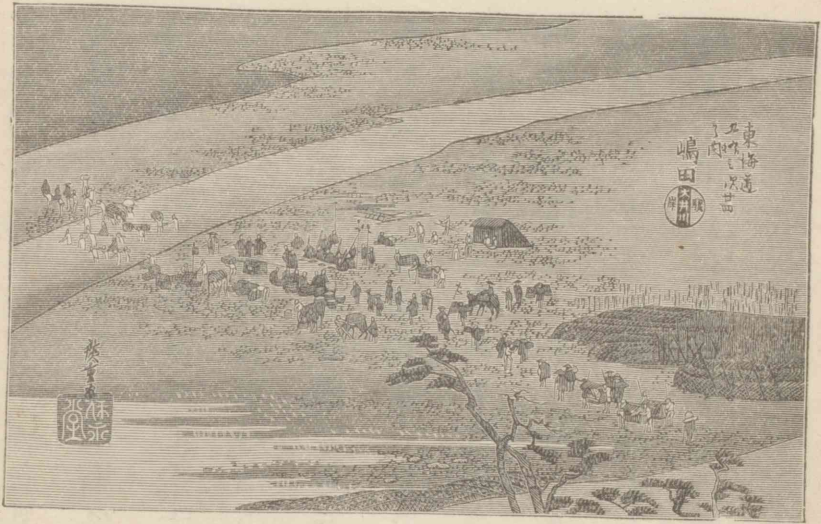
島田が原、今は新田になりて、大井川の水をせき入れて耕作をつとむ。右の方一町ばかりに島田が淵あり。島田より金谷へ一里。

男申しけるは、「いざや、こゝにとまり侍らん。」樂阿彌申すやう「旅なれぬといふは此の事なるべし。この先に大井川あり。

駿河と遠江との境なり

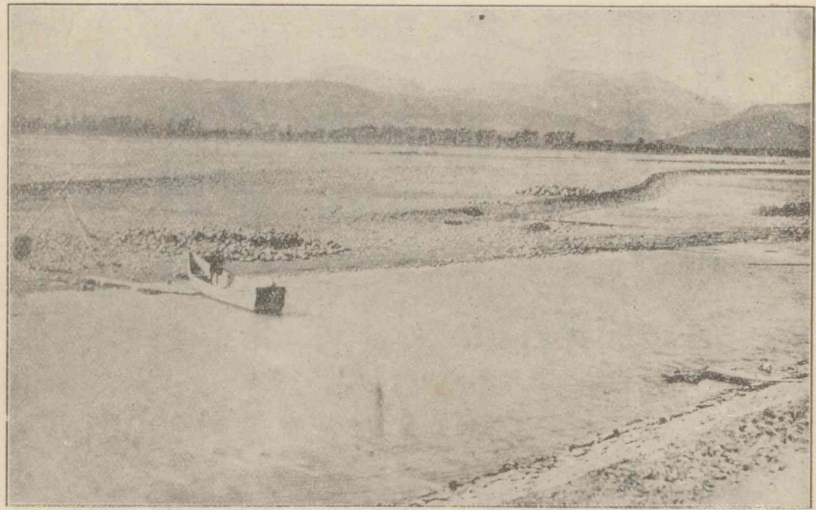
飛鳥川  
大和國高市郡にある、世の中は何か常なる飛鳥川、昨日の淵ぞ今日の瀨となるし  
(古今集)

り。駿河と遠江との境なり。又あの世此の世の境とも見るほどの大河なり。南風には水まさり、北西の風には水落つ。飛鳥川にあらねども、大雨降れば淵瀨かはる事度々にて定まらず。或は東の山の岸を流れて、島田の驛を河中になす事もあり、或は西の方を流れて、金谷の山際にそふ事もあり、又は一帯の大河となりて、大木をながし大石をころばす事もあり、又はあまたに分れて、河原のおもて一里ばかりが間に、幾筋も流るゝ時あり。古より舟も橋も渡すことかなはず。波高く、底には大石流れまろびて足を打たれ、水に溺れて死する者も多く、濡鼠の如くになりて、やうく向ひの岸にあがるもあり。島田のものは川ごしのわざに出づ。



大井川の昔

我が家は水に漂ひ流るれども、旅人の財をむさぼる故に大水を喜ぶ。かの炭を賣る翁が、己が衣は薄けれども、年の寒きを喜ぶが如し。近頃は、島田と金谷との馬かた、川ごしを一味にして、浅き瀬をかくして深き所を通り、わざとふしまろびなどして、腰につくばかりの水にも、二十疋三十疋の錢をとる。まし



大井川の今

て水の深き時は、其の賃限りなし。水のある時分ならば、島田・金谷に宿をとり、川越しの直段をきはむべし。川はたに行きかゝりては、殊の外に賃高し。中にも出家・町人・伊勢詣には、なほも直段高くとるなり。今まこと大水ならば、宿に逗留すべし。然るにこの程は、日和打續きて雨降らず、水は定めて少なかる

べし。今夜島田に泊りて、大河を前にかゝへんこと然るべからず。もし川上に雨ふり、夜の間水まさらば、くやしからん。道は只一里なり。金谷にこえて泊り給へ。くたびれ給はば馬にめせ。とて、島田にて馬をかり、男をば打乗せ、樂阿彌は徒歩にて行く。

「さて此の川に鮎あり。水の浅き時は鵜繩を川上より引いてさがり、これにあたりてはねあがる鮎を、大狹網をもつてすくふ。津の國の鼓が瀧にて鮎を汲むが如し。などうち物語りて、川ばたに行きて見れば、おもひのほか水おほし。されども馬方心得たるものにて、瀨を尋ねてわたす。樂阿彌も、からじりの馬はあふなきものぞ。わきを見れば眼の

津の國の鼓  
が瀧  
攝津國有馬郡  
にある。有馬郡  
温泉第一の勝  
景といはる。  
懸泉三十六  
尺

まふものぞ。眼をふさぎ、よく鞍つばにとりつき給へ。」と、男に力を添へて、ほい／＼。というて渡るうちに、いつの間にか樂阿彌坊は行方しれずなりぬ。

男は馬に渡され、馬子諸共に岸にあがりて、これはそも御坊の流れ給ひけり。とて、川下を見れば、一町ばかりの程に、何とは知らず黒きもの、浮きつ沈みつ、見えつ隠れつして、やうやう岸の上に這上りたるをみれば、樂阿彌なり。「いかに。」と問へば、さればこそ、水底を流るゝ石に躓き、ころりとまろびたれども、水心を知り侍れば、立泳ぎ臥泳ぎなどしてあがりぬ。とて、ぬれかたびらしぼり、章魚からげに裾をからげて、金谷をさして行く。

（淺井了意―東海道名所記）

淺井了意  
京都の人。著  
作家。寶永六  
年歿。年七十  
六

一三 舟路

海にして	ひく艦の聲
水を撃つ	音のよきかな
大ぞらに	雲はたよひ
潮分けて	舟は行くなり
しづかなる	空にすかして
波のいろの	青きを見れば
みなそこや	果も知られず
ながれ藻の	浮きつ沈みつ

舟のほら  
 宗長  
 美つ  
 五七  
 調  
 舟のほら  
 二年行してはる

みどりなす	草のかげより
わき出づる	泉ならねど
おのづから	みち来る汐は
うなばらの	うちに溢れぬ
さながらに	とほきしらほは
むれをなす	まきばのひつじ
吹きおくる	かぜに飼はれて
わだつみの	野邊を行くらん

五  
 海上のわらわ  
 舟と雲と  
 一七  
 七  
 大海のわらわ  
 心よしのか  
 三  
 四  
 三

島崎藤村  
詩人、小説家

雲行けば  
舟行けば  
空と水  
もろ共に

舟もしたがひ  
雲もまた追ふ  
相合ふかなた  
けふの泊へ

(島崎藤村―藤村詩集)

一四 燕

明治天皇御製

燕とぶかげのみ見えて田植時

家に人なき小山田の里

燕は春分に飛來り、雁は春分に翔り去る。同じ鳥ではあるが、たがひに季節を期して袂を分つといふことは、面白い約

4490

東である。

燕來る時になりぬとかりがねは

其の雁と燕とが途中で出會うた。

燕は郷國の便りを雁に聞き

愛郷心に富んでゐる燕である。

私は雲雀の快活を愛し、鶯の溫雅を懐かしむと共に、我が燕の敏捷を賞讚する。彼が全速力を出す時には、一秒時間に何町とか驅けるといふことである。

あそぶとも行くとも知らぬ燕哉  
つばくらや御堂の太鼓返り打ち

去來  
也好

去來  
姓は向井、號は名  
は兼時、號は名  
落柿舎、號は名  
十哲の、號は名  
永元、號は名  
五十四、號は名  
也好  
安永、天明頃  
の俳人

鳥西  
の明和・安永頃  
俳人

つばくらや朝起きなれし八軒屋

鳥西

春の夕ぐれ、野に出て見ると、燕が群を成し渦を捲いて飛びかうて居る。誰やらの句に、

入口に燕群れるる小村かな

平和なる首夏山村の情景、見えるやうである。すうつと飛んでひらりと身をかはすところから、

ゆきく／＼てひらりとかへす燕かな

子規

燕は物覚えのよい鳥で、毎年巣くふ人家の軒をば、容易に忘れないといふことである。農家では梁に巢籠りをこしらへて、首を長くしてこの鳥の來訪をまつてゐる。どんなに土間を穢されても、顔を擧げないのみか、若し訪問しない年

子規  
名は常規、別  
號竹の里人、  
欄祭書主人、  
明治新派俳諧  
の爲に力めた  
五人。明治三十  
五年歿。三十六

三才園  
夜館の様子  
鳴の本の名

がある。老人などは殊に案じ顔である。是は一つには、この鳥が人家に取つての恩人であるに因る。政府でも保護鳥として捕ることを禁じて居る。

「焼野の雉子、夜の鶴」といふが、此の燕が子雛を育てる有様は、人の子にかぎりない感銘を與へる。殊に子雛の翅がやうやう黒く伸び、巢から飛立たうとあせるのを、親がおしなだめながら、自らあたりを舞廻つて、飛揚の態を教示するあたり、何とも云へぬ感じを湧かしめる。斯様な日が凡そ一週間ほどつゞくと、いよいよ、實地の飛行試験で、長男から一羽づつ、順に、先づ天井のあたりを飛翔せしめ、馴れるに随つて、庭から屋根のあたりまで、手を取りながら飛廻るのである。

自分はしみぐと親のなさを省みた。

燕はまた貞操の鳥である。昔さる所に年頃の娘が居つた。彼の女は慈悲深い親のすゝめに依つて簪を貰つたが、ふとした病が基となつて夫は亡き數に入つてしまつた。泣明かした娘の瞳は、容易に晴れやかな色を見せなかつた。親は色々になだめ慰めながら、やがて再び夫を迎へさせて、其の悲歎を和げようとした。これを聞いた娘は、

「おなさけのほど身に泌みてうれしう存じますけれど、えにしなそんぐいふければこそ、あの方とながの御わかれとはなつたのでございませう。どうか此のうへの御なさけでございませう。私に生涯亡き夫の菩提ぼだいを弔はせていたゞきた

う存じます。」

泣くく父に訴へたが、父はいつかな聽入れず、

「汝の申す條、一應は尤であるが、それでは、明日をも知らぬ父をどうしてくれる。行く末短い父に、早く初孫の顔を見せるが孝行といふものぢや。」

すると娘は重ねて、

「さらば父上、只今此の軒に巣くつてゐます燕の雄を亡きものにして、雌に目じるしを附けて放ち、若し此の燕が來年他の雄燕と連立つて軒に歸りましたなら、其の時には私も父上の御意に従ひませうほどに……」

父は娘の乞ふがまゝに、本意なくも雄燕を亡きものとし、雌

善 塚  
Bodhi

燕の頭に赤い糸を結んで放してやつたが、ひと歳経つて其の雌燕は、只一羽甚だ裏れて戻つて來た。そこで父親も意を翻して娘の決意に任せたといふことである。

語らはん友にもあらぬ燕すら

遠く來るはうれしかりけり 香川景樹

新緑の色のと、のふ頃、初燕の聲を聞くのは實際うれしいものである。

人だにも忘れはてたるわが宿に

かへる燕のあはれなるかな 熊谷直好

落ちぶれた人の身には殊に深く感じられるであらう。

すく／＼と生立つ麥に腹すりて

熊谷直好  
周防岩國の人  
後大阪に住す  
香川景樹の高  
弟、文久二年  
歿、八十一歳

香川景樹  
京都の歌人、  
桂園と號す。  
天保十四年歿  
七十六歳

橘曙覽

越前福井の歌  
人、國典を研  
究し最も萬葉  
集に通じた。  
明治元年歿、  
五十七歳  
天野藤男  
著作家

生き／＼とした元氣が胸に溢れて來る。

つばめ飛びくる春のやま畑 橘 曙 覽

(天野藤男―四季の田園)

一五 綠蔭閑話 隨筆文

「風流を楽しむ花園ならで、後の畑前の田の作物に志し、自ら鋤をとりて耕し、先祖の賜と、命の親に懇を盡し、吉野の櫻、更科の月よりも己が業こそたのしけれ。朝夕心をとめて打向ふ菜種の花は、并出の山吹よりも好ましく、麥の穂の色は牡丹芍薬よりも腹こたへあるかと覺ゆ。朝顔よりも夕顔こそよけれ……」

愛  
三ツに別  
土、口、愛、か生物に左  
いす、愛  
父の愛  
子の愛

敬愛  
誠



と一茶が「勸農の詞」でいつて居るほどの意味でなくとも、眺め樂しむといふ上からは、風流を旨とした花圃も、收穫を目的とした菜園も同じである。觀賞を主にした樹や草の栽培も無論結構ではあるが、心して茶園の美を味ふことも捨てがたいことである。

豌豆の花、胡瓜の花、茄子の花、さげの花、唐黍の廣葉芋の葉の露、菜の花、畑、麥の穂、並、葱の花、何一つとして愛すべき趣を持たぬものはない。季節々々に變つてゆく菜園の眺めには、實利と享樂とのいみじき調和がある。收穫にのみ心を奪はれて、自分の耕し培ふ田畑の美しさに、全然無關心である農夫がありうるであらうか、自分の植ゑた樹木の伸び榮

いつては、  
は長野  
十三  
五  
ら子

えるさまをよろこぶ歡びは、決して、單なる打算の結果ばかりではない。そこに農作にいそしむ心の健かさがある。

○

鮮かな綠色の葉蔭に、ルビーのやうな色をした莓の玉の鈴なりに實のる頃の莓畑の眺めほど、爽かな氣持を與へるものは少い。わけて露にぬれた緑の葉をかきわけて、あのみづみづしい紅玉を摘み集める五月の朝のすがくしきは、多くの年中行事のうちでの最も嬉しい事の一つである。

わが庭になりし莓を今日もかも摘みてまゐらす永病む父に

これは先年、父の最後の病を看護してゐた頃の歌である。

父の死後、私たちは毎年きまつて、苺の初なりを もぐといふ れを先づ父の靈前に供へることにしてゐるのである。

わが庭になりし苺の初なりを もろ手にもれる今朝のうれしさ

露しげき葉をかきわけて朝なく、子等とわがつむこ  
れの紅玉

今年もいつの間にか、苺のみの頃となつた。苺畑の垣の外には、昨日今日ひなげしの美しい花が、細長い莖もろとも快い五月の風にゆられてゐる。雛げしの花の美しさは無論愛すべきであるが、私は更にこの花が、ばらくと惜しげもなくその美しい花片を振落した後に、くりくとしたけ

し坊主のあのあどけない實を結ぶ様子を、妙にいぢらしく 思ふのである。

○

夏の川釣も私の最も好きな事の一つであつたが、四年前の八月、五歳になる男兒を亡くしてから、その記念の爲に、私は釣といふことをふつつりとやめてしまつた。死の前日まで私の釣のお伴をして歩いてゐたあの子を思ふと、私は今でも胸をかきむしられるやうに悲しい。彼の持つ小さなバケツの中へ水を入れてやり、二三尾の鮒を泳がしてやると、彼は何もかも忘れてそれを楽しんで居た。が、暫くして彼は何事にかひどく驚いたやうに、頓狂な聲で私を呼んでい

つた。

「おとうちゃん、鮎がバケツを食つてるよ。」

なるほど、バケツの内側に口をつけてばく／＼やつてゐる鮎の様子は、幼い彼の頭に、さう思ふに十分であつた。釣に夢中になつてゐた私も、その奇抜な訴には、何もかも忘れて笑ひ興ぜずにはゐられなかつた。

彼はその日の夕方突然病み出して、その翌日の夕方にはもう此の世のものでなかつた。しかもそれは、妻がある近親者の訃に接して、他行した不在中の出来事であつた。その子の名は元雄といつた。

わが元雄なが心地よきわらひ聲ふた、び聞かむすべ

なきものか

母の行き慕ひて泣きてとゞめ得ばかゝる歎きはせざらましものを

母を呼び母を待つだにあるべきを、もだしていにしなれはいとしも

私がむちやくちやに好であつた釣をやめることの出来たのは、全くこの子のお蔭である。今ではもうその季節が來ても、釣の事など思ひ出しもしないやうになつた。

私が釣をやめてから、不思議に私の子供たちも釣に行かなくなつた。因縁は妙なものである。

愛兒の死を記念するために釣をやめた私は、父の死を記念  
するために、桐苗を少しばかり植ゑた。

ち、のみの父がかたみのうら畑に霜月われは桐苗を

植う

ましろなるをちの山なみながめつ、桐苗を植う朝の  
畑に

それからもう五年過ぎた。桐は驚くほど成長した。しか  
も私はこの春——たしか三月の十八日であつたと記憶す  
る。私の愛飼してゐた三羽のチャボの骸をそのうちの最  
もよく伸びた桐の根元に埋葬して、型ばかりの墓をつくつ  
てやつた。

ウのみの父が  
後庭の  
桐の木の根元  
に埋めて  
おいた  
桐の木の根元  
に埋めて  
おいた  
桐の木の根元  
に埋めて  
おいた

それらのチャボは、雛から育て上げた、とりわけ愛着の深い  
ものであつたが、一寸の油断から、夜中犬にやられたのであ  
つた。私が彼等の悲鳴に愕いて目をさますなり飛出して  
行つた時には、まだもがき廻つてゐたのであつた。鳥屋の  
中へ入れてやると、間もなく三羽とも死んでしまつた。  
桐の木は年一年延びてゆく。チャボの墓標となつた一本  
は、とりわけ今年からよく延びることであらう。そしてい  
つとなしに、かうした記憶も忘却の底に葬られる頃には、そ  
の桐の木もおそらく誰かの手に伐られてしまふことであ  
らう。

○

子供の書くものには、時々驚かされる。昨年昨年の暮にも、一人の低能タラシ兒こに近いといはれてゐる農家の男の子の書いたといふ、一篇の童謡めいたものに、ひどく驚かされたことがあつた。それは、

馬よ 馬よ

今日はねんごつけた

今日は早くから ねんごつけた

くたびんたか 馬よ

早くまやへはいつて休んでくれ

またあした

といふのであつた。「ねんごつけ」は、年貢米を運ぶ日といふ

意味の方言「まや」は「うまや」の意、くたびんたか「はくたびれたか」の訛である。受持の教師の話によると、この子はまるで流行の童謡などいふものを讀んだこともなく、どの學科に於ても成績の劣等な兒童であるといふ事であつた。それに、この「馬よ」と假に題される童謡も、行も句切もなくへ口へ口と書きつゞけたものであつたのを、教師の手で整頓して見たのださうである。

しかし、この純朴な數行の中に、何といふ温かな情愛の流露してゐることであらう。「くたびんたか、馬よ」の一句の涙ぐましさ。「またあした」の一語のあたゝかさ。これこそ誠の農人の歌であると、私はしみじみ嬉しく思つた。主觀的に

感情をのべたうちに、彼等の生活の姿が**いみじくも**描かれてある。

時雨の空下に黒くひらけてある刈田の荒涼たる景色が、私の眼に見える。その荒涼たる刈田の中に通じた凹凸の多い細道が、私の眼に見える。そのさびしい道を夕暮の寒い風に吹かれながら、終日の働に疲れた馬を曳いて、自分も疲れた足を引きずつて、向ふに見える落葉した森が**ぐれの村**へととぼく／＼歸つて行く少年の姿が、私の眼に見える。やがて夕闇の中で、ざく／＼と藁を刻む音が聞える、とろ／＼と煖かさうに爐火が燃えてゐる、薄暗い茶の間が見える。その爐端に、微かに聞えるさく／＼といふ馬の藁を噛む音

聖王

相馬御風  
名は昌二。小  
説家。文章家

に耳傾けながら、こくり／＼と快い居眠をやつて居る、焚火に照された健康さうな少年の顔が見える。土間の据風呂に浸りながら、**追分**がなんかを小聲で唸つてゐる男の聲も聞える。流しの方で、夕食に使つた食器を洗つてゐるらしい**瀬戸物**の打合ふ音もきこえる。さうした**幻想**がはてしもなく展開してゆくところに、この童謡の味はひがよいよ豊になつて行く。

私は永く、この名も知らない少年の詩を忘れることが出来ないであらう。  
(相馬御風―綠蔭閑話)

一六 信濃路の旅 その一



善光寺 長野市にある  
三國傳來の阿彌陀如來をまつる  
川中島 犀川と千曲川とに挟まれた土地。上杉謙信と武田信玄との古戦場  
村と表清

れば、其の色、染めたらんよりも麗し。

山々は萌黄淺黄やほとゝぎす

淺間は雲に隠れて、煙もいづこにたち迷ふらんと思はる。

汽車を驅りて、善光寺に詣で、また川中島を過ぎて篠井まで

たち戻る。古戦場はいづくのほどとも知らねど、山と山と

に圍まれて、犀川の廻るあたりにやあらん。河の水はいた

く瘦せて、ほとりの麥畠空しく赤らみたり。

日はくれぬ雨はふりきぬ旅衣

袂かたしきいづくにか寝む

次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催して辿り行け

ば行くて遙かに山重なれり。野の狭う突りて、次第々々に

入る山路けはしく、弱足にのぼる馬場峠、さても苦しやと休

む足もとに誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねば

や、こぼるゝばかりなり。少し上りて、とある樹蔭の葎簀茶

屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を四五町の麓に汲み

てもてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれた

り。一樹のかげ一河のながれとや、ひじりの教も時にあう

てこそ有りがたけれ。

此の夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとゝむ。隣室の雜

談に夢覺されて、つとめてこゝをたち出づれば、はや爪先あ

がりの立峠、旅の若衆と見て取つて馬子が馬に乗れとの勸

め、ありがたや、乗りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。

説書

土佐日記  
あ。



昨日の馬場峠は、なにとて苦しみし。路の邊に咲く白き花を何ぞと問へば、これなん卯つ木と申す。といふ。いとうれしくて、

むら消えし山の白雪来て見れば

駒のあがきにゆらく卯の花

峠にて馬を下る。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗取

松本にて晝餉したむ。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田まで三里の道を馬車にちめて、洗馬まで辿りつき、饅頭にすぎ腹をこやして、本山の玉木屋に宿る。

本山  
長野縣東筑摩郡洗馬の南一里弱

櫻澤  
本山から二里

桃源  
支那湖南省にある仙境

奈良井  
木曾谷の北口をなす村

鳥居峠  
奈良井から二十町敷原へ二社五町の鳥居を立上げて、その上を遙拜する

一七 信濃路の旅 その二

本山を出て櫻澤を過ぐれば、こゝ木曾の山入。山のけしき水の有様はや尋常ならぬ粧にうつゝ、をぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳に立ちて珍し。

奈良井の茶屋に息ひて、菜萁はなきか。と問へば、菜萁といふものは知り侍らず。珊瑚實ならば、背戸にあり。といふ。山中に珊瑚、さてもいふかすと裏に廻れば、やはり菜萁なり。

主人の女房、親切に採りてくれたり。峽中第一の難處といふ鳥居峠は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力に面白う攀上る。

馬の背や風吹きこぼす椎の花

藪原  
西筑摩郡

宮越  
藪原の南二里

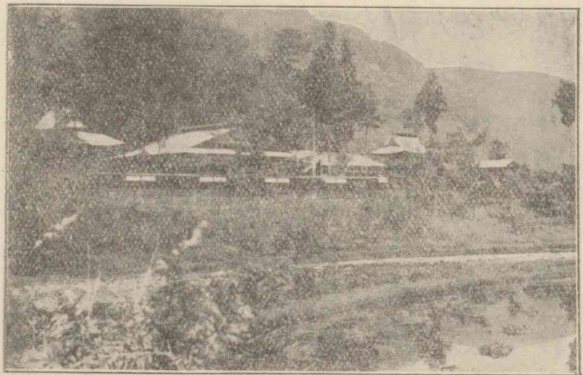
德音寺  
壽永年間の建  
立。義仲の位  
牌をまつる

頂にて馬を下り、つくづく四方を見おろせば、古木鬱蒼谷深  
くして、樵夫の小徑微に隠見す。珍しく晴れわたりたる空  
の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原の驛なり。或家に  
たち寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川に沿  
うて下るなる。白雲をあやどる山脈はいよくせまりて、  
被せかゝらん勢怖ろしく、奥山の雪を解かして清らかなる  
水は、谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のたゞ中に、大なる岩  
の一つ突きいでたる上に、年ふりたる松の枝おもしろく、龍  
にやあらんと思はれたるもをかし。宮越の村はづれに千  
みて待つこと半時、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたる  
が、畫の中よりぞあらはれ出でたる。笠をぬぎて慇懃に徳

手桃陽  
花洲  
保明  
の  
記  
り  
を  
あ  
ら  
わ  
す  
る

旭將軍  
木曾義仲

木曾宣公  
義仲の法名は  
德音寺院殿義  
山宣公大居士



音寺の道を問ふ。翁のいふ、<sup>わかずるのまをらに、あつちやうか</sup>さても優しの若者や。旭將軍  
のなき跡を弔はんとてや、こゝまでは來給へる。こゝに茂  
れる夏木立は八幡の御社なり。か  
しこの山の上こそ昔の城の跡なれ。  
徳 このわたりの畑も、<sup>あつちのまをらに、あつちやうか</sup>つはものどもの  
住みし夢の名残なるものを、今は桑  
の木ばかりぞ秀でたる。と、一つ一つ  
に指さす。そゝろに古を偲ぶ言葉  
のはし、この翁、<sup>あつちのまをらに、あつちやうか</sup>謠ならば、かき消すや  
うにうせぬべし。日照山德音寺に  
行きて、木曾宣公の碑の石摺一枚を求む。この前の淵を山

福島宮越から二里木曾谷中第一の町

吹が淵（あきつめし）巴が淵と名づくとかや。福島をこよひの旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。翌日、朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて、書流す句に、

折からの木曾のたびちを五月雨

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、又降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き行きて棧に着きたり。見る目危き兩岸の岩は、數十丈の高さに削りなしたるさま、一隻の屏風を押立てたるが如し。神代の昔より蒸し重なりたる苔の、美しく青み渡れるあはひくく、何げなく咲きいでた

棧 福島と上松との間にある

蕉翁 元祿の俳人、松尾芭蕉の行を好み諸國に記念の句を殘してある。「かけはしや命をからむつたかつら」

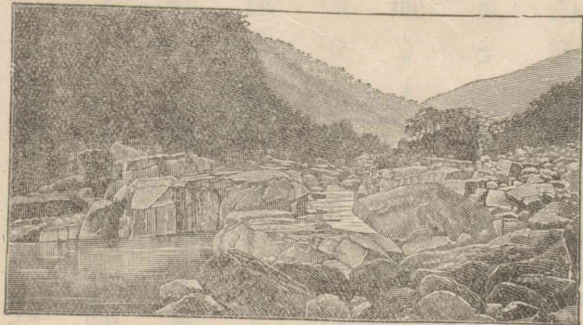
る杜鵑花の麗しさ。（狩野派の畫にやあらん、土佐畫にやあらん。）下を覗けば、五月雨に水嵩増したる川の勢、渦まく波に雲を流して、突きては割れ、當りては碎くる響、大磐石も動く心地して、うしろの茶屋に入り、床几に腰打ちかけて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしはやまず。蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るに、わが身も空中に浮ぶかと疑はれ、足の裏ひやくくと覺えて強くもえ踏まず。通り來りし方を見渡せば、こゝぞ棧のあととおぼしきも、今は石を積み固めたれば、固より往來の煩もなく、只蕩かづらの力がましく這ひまつはれるばかりぞ古の倂なるべき。むかしたれ雲の往來の跡つけて

上松  
福島から二里  
半  
寢覺の里  
上松から半里

わたしそめけん木曾のかけはし

上松を過ぐれば、程もなく寢覺の里なり。寺に到りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指ざして、こゝは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川のたゞ中に松の生ひたる、大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押したてたる岩を屏風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、こしかけ岩、組岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など

寢覺の床



正岡常規  
六八頁子規の  
註を見よ

申すなり」といふ殊勝氣にぞしやべりける。誠や、こゝは天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん。岩石は峨々として高く、低く水に臨み、凹めるところは渦をなし、逼れるところは瀧をなす。いかさま仙人の住處とも覺えてたふとし。

(正岡常規—頼祭書屋俳話)

嵯峨  
山城國葛野郡  
太秦附近以西  
嵐山に至る  
沓

一八 村岡局

二二子期

史解

村岡の局は名を矩子といひて、京都の人津崎元矩の女なり。天明六年、嵯峨のほとりに生れ、八歳の時、始めて近衛家に仕へけるが、年長ずるまゝによろづに賢く、まめやかなるより、

擢んでられて老女セウカシとなり、村岡と稱せり。天性いと嚴かにして慎み深く、殊に勤王の志に篤く、いたく王室の衰へさせ給へるを悲しみ、常に志ある人々と親しみ語らひて、國のためには身を失ふとも厭はじ。といへりとなん。

嘉永安政の間、開國鎖港の論こもく起り、互に挑み争ひて、

世の中漸く騒さわがしく、正義黨は近衛左府、水戸前中納言などを戴き、鎖港の説を唱へて、よそながら朝議を輔け奉り、開國

黨は九條關白、井伊大老などを首とし、幕府の議を賛け成し、

如何にもして世界の様を九重の奥かくらに聞えあげ、勅許を得て

外國と交易の道を開かんと、様々に心を盡しけり。かゝる

折柄、時の將軍家定公子なくして、世嗣よせついでいまだ定まらざりし

近衛左府  
近衛忠熙  
水戸前中納言  
德川齊昭  
九條關白  
九條尚忠  
井伊大老  
井伊直弼

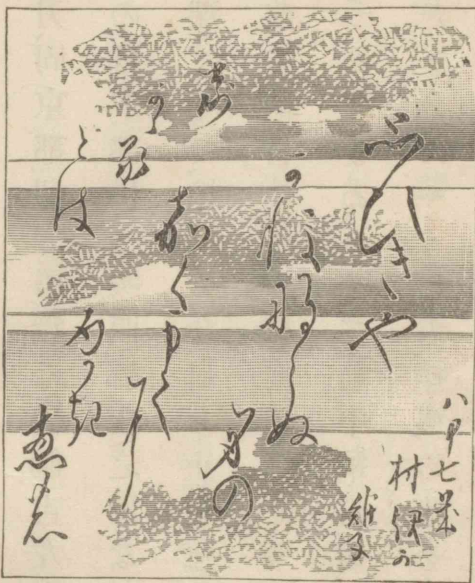
家定  
德川十三代將軍

慶喜卿  
齊昭の第七子  
一橋家を繼ぐ  
家茂の後を承  
けて十五代將  
軍となる。大  
正二年薨七十  
七歳

かば、此の事はやく定めずば、おのづから人の心も動きて、安からぬ事の出で、こんも測られずとて、安政五年幕府にては世子を選び定むべき評議起りぬ。時に水戸の臣に安島帶刀、同京都留守居役に鵜飼吉左衛門、其の子幸吉、其の外薩摩の目下部伊三次、西郷吉之助など聞ゆる輩あり。尊王の志深くして、攘夷の念自ら止め難く、いかで勅命を賜はり、水戸前中納言の子一橋慶喜卿を將軍家の世子と定め、早く職をつがせまゐらせて、前中納言將軍の父といふを以て後見したまはんやうにし、攘夷の事を果し叡慮を安んじ奉らんと思ひ立ちけり。されども勅命を賜はらんこと容易き事にあらねば、こは偏に近衛公を頼み聞ゆるに若かず、公をたの

筆蹟  
か十七歳村を  
思ひきや敷な  
まらぬ身のかく  
恵の露かき  
とは

紀伊宰相  
徳川家茂



村岡局筆蹟

みまゐらせんには、村岡の力を借らずば協ふべからず。とて、まづ村岡を語らひけり。村岡は固より勤王の志深く、君の爲には身をも棄てなん  
とまで思ひ入りたる頃  
なりければ、いと易く諾  
ひて、しかじかの人なん  
侍る。と聞えて、左府に見  
参せしめたり。左府は  
此等の人々を延見し、深く其の志を愛でて、いかにもして本  
意遂げさせんと心を盡されける程に、直弼等は早くも紀伊  
宰相を世嗣に定め、水戸中納言をはじめ、そを助くる人々を

間部詮勝  
越前國鯖江の  
城主、老中と  
なる。明治十  
七年歿、八十  
三歳

清水寺  
京都洛東清水  
堂にある。観音

黜けければ、正義黨の心盡しは水の泡とぞなりにける。村岡は之をいみじう口惜しくおもひて、更に一策を案じて、朝に奏しけるに、帝その志をめでさせたまひて、やがて乞ひ奉りしまゝに、水戸前中納言に勅諭を賜ひけり。日下部伊三次、鵜飼幸吉等、それを捧げて東に下り、密かに前中納言に傳へけるに、隠れたるより顯はるゝはなく、此の事早くも幕府に聞えしかば、直弼、閣老間部詮勝を京に遣はし、勅諭の事に與れる輩を厳しく探り求め、遂に鵜飼父子を始め、尊王攘夷を唱ふる輩數十人を捕へて、江戸に送らしめたり。時に安政五年十月にして、世に戊午の難といふもの是なり。是より先、京都清水寺の僧に月照といふものあり、これも尊

月照 清光寺成就院  
住僧。子。玉初  
 宗光 名。久。子。安。陸  
 五名 年。十。一。月。陸  
 摩年 湯。に。一。月。陸  
 六歳 した。一。月。陸

大君のたゞけの  
 かしかり  
 さつりのせり身  
 はしすおとれ  
 とりたへへの月の  
 一すかち  
 せりのなすに  
 せりりぬる  
 安政元年三月  
 けの代

王の志いと深きを、近衛左府いたくめでて、常に近侍せしめられ、村岡も年来いと親しく語らひけり。然るに、鶺鴒等もろともに追捕せらるべし。と告ぐる者ありければ、左府いみじう悲しみ惜しみて、西郷村岡等に謀りたまふ。みなく心をやましめけるが、やがて西郷が、暫く身を潜めて時を待たるべし。外にはすべも候はじ。といふまゝに、偏に彼に打任せて、しばし鹿兒島に隠れて、事をさまるを待たしめ給ひける程に、かしこにても幕府の追捕きびしくして、え潜みあへず、同年の十一月に、遂に薩摩湯の藻屑となりにけり。その明年正月ばかりに、京都町奉行の廳より村岡を召しければ、いかなる事ぞとて、直ちに行けるを、其のまゝにとゞめ

られけり。これも亦正議黨に與せし咎なりけり。さて二月の末つかた、江戸に送られ、又の月、松平丹波守の館にあづけられぬ。秋になりて、鶺鴒等もろともに、白洲とかゆ、しき處に引出でられて、鶺鴒等を助けて、勅諭下賜の事を賛け成しし罪を責め問はれけれども、村岡少しも恐れたるけしきなくて、何事も、老のけのあさましさに、悉く打忘れたり。とのみにて、何事を問へど、さらにいはねば、司人たち困じはてて、更に、汝が主なる左府殿には、日ごろ何事をして明し暮し給ふ。と問ひしに、女の身は外様の事は知らず。といひて答へざりけり。これ皆主家に煩をかけじとの心しらひなるべし。司人また、左府殿には此の頃とかく政にたづさはり給

ふと聞ゆるはまことか。と問ふに至りて、村岡は容を更めて「あやしくも問はせたまふものかな。近衛殿は藤原氏の長者にて、官は左大臣におはしますを、國の政にあづからせ給ふは言ふもさらなり、さのみいふかり給ふべきかは。」と理りせめて詰りければ、司人返すべき言葉もなくて止みつ。

さて日頃經て、いよく罪科定まりて、三十日ばかり籠められけり。其の程はかしづきをあまた附けられて、衣裳なども、六日七日毎に新にと、のへて着せられけり。さるは時の大御臺所入輿の折、村岡よろづ後見まゐらせしかば、之に報い給へるなり。かくて九月に至り罪免されて、十月京に歸り、又もとの如くに近衛家に仕へたりけるが、慶應二年、老

大御臺所  
將軍家定の夫  
人にた  
このひ

八有  
大政官の長官  
た改不臣

いて今は宮仕もなりがたしとて、里にまかりて、嗟峨の輿に直指庵といふ庵を結びて、いみじう行ひて住みゐたりし程に、明治五年、太政官より其の王事に勤めたる績を賞し、終身現米二十石を賜ふ由仰せ下され、のどかに老をやしなひ、貧しき人を恵みなどして、楽しく月日を送りけり。

此の間に、西郷隆盛がしばしば、此の庵におとづれ來りて、過ぎにしかたを語らふことあり、或時は懷舊の涙に袖をしぼり、或時はをさまる御代にあひぬるを喜びつゝ、八十路の坂を越えても、猶すこやかなりけるが、明治六年八月、八十八にて身まかりけり。後に、尊王を唱へて王政復古の基をたてける人々に、位階を贈らせ給ふ事あり。村岡も明治二十四



年十二月に從四位をぞ贈られける。

(日本の婦人)

三木露風 阿蘇 妻をしいたい

一九 轉り

光の消ゆるいや果てに  
おもひはゆるくとびゆけり  
茜のほひやはらかく  
つゝめども なほそよげども

しづかに海にしががせきよ  
ものゝこころはなぬ  
そのしづかに  
つゝめども

をちこちに啼く砂ひばり  
音色をゆりてこゑかすか  
海べも丘も波だちて

よこたの  
ひかりは消えなげれど  
そのよこたの  
はしづかに

うすみどりひく靄のなか

時はしめりもあたたかく

茜のしづく 草の榮

ほゝゑみかはす空間に

鳥のさへづりなほのこる

鳥のさへづり わがむねに

あだに染みゆくゆめごゝち

光は消えつ やはらかに

おもひとびさる日暮時

三木露風  
詩人。最近に  
羅風と改めた

水戸をわしとて あたゝの  
はつなつしよかを  
させを  
夕のしづかに  
その鳥の聲は  
三木露風 象徴詩集  
かはらみ

二〇 夏の草花

夏は風も親しむべし。さはいへど、なほ草花の咲誇れる庭園こそ嬉しけれ。葎蓬といふだに、なほ我が身の程の花は咲くなり。天の愛で培へる花に、いづれか優り劣りあるべき。親しみて見れば、花といふ花には、それ〴〵愛すべき節

の見出さるゝも面白し。  
 赤豆アサキマメ隠元カクレゲンといふを、彼岸の頃三つ四つ土にふせて置きつるに、六月の中頃よりのび〴〵と成長し、蔓には赤き花をつけたり。いと愛らしき花なれば、毎年之を植うるに、今は庭に無くてならぬもののやうになりたり。

蔓ある草は優にやさしう覺ゆるものぞかし。自然薯といふ芋を人の贈り來りしことありき。あまり細きがありしかば、垣の根に植ゑて置きしに、零餘子カサネあまた實のりて落ちつるが、此處彼處と今年はあまた生出でぬ。竹を添へてやれば、這ひまつはりて茂りあひぬ。白き花の咲くべき頃もをかしかるべし。實のほろ〴〵と秋風にこぼれん程、いかにあはれ深からんと楽しむ。かくふと蔓草を愛でおもふ心つきてより、瓢箪も植ゑにき。絲瓜も植ゑにき。のうぜんはんはれんのふりおもしろき、木通アサビの延びんまゝにのびさせたる、皆とり〴〵にをかしかるべしとて、松杉などに添へて植ゑにき。

朝顔の花はさのみ愛で思はざりしが、今年こゝろは農事試験場に  
いひ遣りて取寄せし芽生のいとも見事に、獅子など名をも  
つくべからん花の、一つ魁けて咲きたるもをかし。南瓜の  
轉がれる畠に、晝顔の花の、眞晝の照りはたゞく日かげを物  
ともせず、咲出でたるを見て、

よられたる草葉の中に咲きにけり

つゆもたのまぬひるがほの花

と、伊東祐命スネナガ大人のよまれし歌を思ひ出でぬ。

スウイートピーの、ほのかをれるもなつかし。去年の秋の  
彼岸に種を蒔きしが、大きく丈のびたれば、竹など添へてや  
るに蔓のこれに縊りて風にゆらくもうるはし。今年の春

彼山行

伊東祐命 國學者、前田夏蔭等に學ぶ  
明治二十二年 歿  
生歿此山行  
江木為彼山行  
アヨカ

萬緑叢中紅

一點 支那の王安石  
が榴を詠じた  
詩中の句

蒔は、丈も低し葉色も悪し。萬緑叢中紅一點とうたひし 榴も夏の庭には面白く、花も實もみかこは仙人めきたり。

仙人サボテン掌こそ面白きものなれ。冬は眠れる如くにして、夏に  
なればいやがうへにも芽を出し、桃色赤黄などの花をつく。  
花は燃ゆるが如く匂へるに、我が上とも知らぬやうに、山の  
如く冷かに立てる様のをかしさよ。狭き庭を心ひろく  
と見渡して、花の品定めしつゝ、縁に腰打掛けたる程、昨夜の  
雨に萩の泥に塗れ伏したるを見出でて、あな、あはれ。と急ぎ  
かき起せば、はや花の咲きたる枝もありけり。木下幸文が、  
露にふす萩の下枝かき起し

見れば花こそ咲きそめにけれ

木下幸文 歌人、香川景樹  
の門人、文政  
四年歿、四十  
三歳

三宅花園  
名は龍子。雪  
嶺氏の夫人

春竹  
熊本市の東郊  
外にある  
水前寺  
もと寺名であ  
るが、轉じて  
地名の如く用  
ひられる。熊  
本藩主の別墅  
であつたこと  
園のこと

と歌ひしをおもひ出づ。かく其の人の歌などをおもひ出  
でて、同じ花にむかへば、さも其の人と對ひて語りあふ心地  
もするなり。花に寄せたる人のこゝろは、今のも昔のものな  
つかしうこそ。

(三宅花園)

二一 水あそび

春竹から東北水前寺に向ふ。水前寺は少年時代から青年  
時代の初にかけて、吾が生涯に織込まれた明珠の様な記念  
である。三歳から十八歳の春まで、(内三年は京都に居たが)  
父母の下に余が住んだ家は、熊本の東郊大江村にあつて、水  
前寺へは半里に過ぎなかつた。其處の芝生や芝山にころ

ランチュウ  
金魚の一種、  
丸子ともいふ  
出水神社  
水前寺園内に  
ある

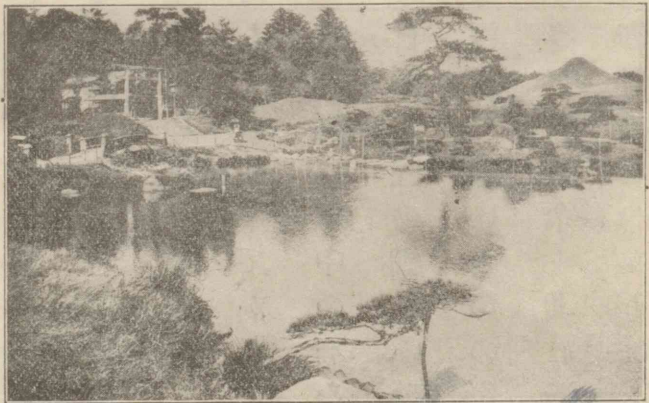
がつた小學校の運動會(出浮<sup>デウキ</sup>)と其の頃は云うた、其處の泉水  
に仕掛花火の朱の時雨が降り、火のランチュウが亂れ泳い  
だ出水神社の祭禮、ほとり近い砂取町の餡餅、餡焼、忘れ難い  
記憶の數々が此處には預けてある。就中砂を分けてぶく  
ぶくと湧出る水の美しさは、眼から魂に滲みとほつて、余の  
水の洗禮は此の水前寺で受けたと言うてもよい。熊本に  
育つた程の者で、水前寺を愛せぬ者は一人もあるまい。妻  
なども、六歳の年始めて連れられて来て、此處に泊る。と駄々  
を捏ねたと云うて居る。妻の父は非常な自然派で、水美し  
い砂取に住みたがつて、一度は地所まで見に来たが、果さな  
いで熊本の市中に死んだ。武藏野に住んで居る余は、とも

鶴子  
著者の姪にし  
て養女、此の  
時年八歳

すれば此の美しい水を夢みる。  
車を下りて、十九年ぶりに此の水の園に踏入る余のこゝろは、一種のときめきを覚えるのであつた。鶴子とさきを争うて、小走りに泉水の石菖のほとりに立つた。此處にも其處にもぶく／＼と湧いて流れるのは、昔ながらの無色透明な、水晶を欺くやうな美しい水である。しかし中島へわたらうとすれば、飛石が傾いたり沈んだりして居る。中島にあつた大きな石の燈籠も見えぬ。幻滅の感は争はれぬ。北を泉頭にやゝ、窄く、南を廣く、琵琶に象どつた此の泉水は、富士を筆頭に東海道うつしの風景と清淺の水とを、すべて東一帯に集めて、西は下へ往く程、深い水に樹木が影を映し

琴子  
著者の宅に出  
入した女學生

て居る。我等は北に折れ、石橋二つ渡つて出水神社前を過ぎ、富士の築山の脚高の土橋を渡る。此の邊には昔水中に砂を寄せて、緑や紫の色美しい水前寺菜を作つたものだ。  
富士の裾野を南の方へ行く。  
やはり水だ。下りて飛石に蹲り、めだかが息つくかの様に、ぶくぶくと小さな泡の球を立てて湧上る水を両手に掬んで、昔の味を懐かしむ。妻や鶴子、琴子も、みな石に跪いて水を掬ひ、それか



ら手巾を出して顔を拭いたりして居る。此の美しい水には、あかりこ蟹が居る。大きいのは濃く、小さいのは鮮明な蝦茶の色をした可愛らしい蟹である。大きいので矮鶏の卵より小さく、小さいのは豌豆よりも小さい。子供の折にはよく手拭に包んで歸つて、つけ焼にしてもらつて、かりかり食べたものだ。今も居るだらう。二つ三つ水中の石を起して覗く。そこには唯金糸の様な日影が、底の細かい砂にちら／＼。揺いて居るばかり、小さな這行く赤いものの影は一つも見えない。それは恐らく小さい日の余と共に逝いて、消失せたのかも知れぬ。物足らぬ氣持で、やゝしばらく水を眺める。此の邊は鶴子の騰越さぬ淺さで、石に擦れ

たりする處に縷の襷を見せる外、日の下に見れば、有つて無いかの如く、澄徹つて殆ど音といふ音をさせないが、汀の石莒を撫で、數々の飛石をめぐり、底の小砂の一粒だもまろばさないで、しかもすべての水は動いて居る、下の方へ流れて居る。ちつと見てみると、二秒置き三秒置きに、底の五色の砂を分けて、ぶく／＼、ぶく／＼と、小さい眞珠の球が續けざまに上つて來ては、ばつと水面に消える。飛石の此處ばかりかと思へば、上にも下にも。びたりと止んだと見れば、またぶく／＼。彼方が消えたと見れば、此方がぶく／＼。ある時は一齊に拍子を揃へて、ぶく／＼、ぶく／＼。嬉しくてたまらぬげな水の様である。子供の笑、少女の囁出、幸福の

つく息でなくて何であらう。永久に若い自然の歡喜が、こ  
こにも母なる地の懷から溢れて居るのだ。立上り、芝生の  
路を傳うて、南に泉水の尾へ行く。狹からぬ此の泉水に湧  
出る程の水は琵琶尻の此處に落ちよつて、土橋を潜つて三  
間程の川になつて居る。底は見えずいて居て、大人の丈も  
立たぬ程深く、さばかり音を立てぬが、箭を射る様な水勢を  
物の數ともせぬ鮪なまこいだの類が、群をなして泳いで居る。此  
の土橋から飛んで泳いだ昔の夏を憶ひ出す。流の眞中に  
水を二つに裂いて突立つ一叢薄の巖は、以前より餘程瘠せ  
た。流の向ふに、一軒水に挟まれて涼しげな旗亭が見える。  
土橋を渡り、今一つ亭前の細流に架けられた小板橋を渡り、

客一人も無い座敷にあがつて、午餐を命ずる。今日は十月  
六日、併し南國の日は熱して、氷を思ふ日の午である。水の  
欲しい我等は、水に挟まれた座敷に、存分水見の饗にあづか  
る。東表は泉水尻のかの本流ではないが、他の小さな泉川  
が、咽を鳴らして走つて居る。裏の方には、大泉水の玄孫と  
も云ふべき、別に一泓の泉池があつて木立の蔭深く、水も中  
中深さうだ。湧出の量も多く、かの清淺のかはゆいぶくぶ  
くに引換へ、拳大の泡球が底の方からぼこ／＼盛上つて來  
ては、ぐる／＼つと云ふ響を立て、林影幽かな水面にばつと  
散つて、尋常の水になると、さつと下へ流れ出て行く。居常  
水に渴して居る武藏野の遊子、縁に足なげだして、飽かず水

徳富蘆花  
名は健次郎。  
小説家、文章家

の踊を眺める。

(徳富蘆花―死の蔭に)

二二 蚊やり火

落合直文

落合直文

號は萩の家。  
國文學者、歌人。明治三十三年歿、四十

蚊やり火に筆のさやをばたきながら

君とすゝしき月を見るかな

窓の外に竹二もとを植ゑにけり

今宵は月もまちて眺めむ

佐々木信綱

佐々木信綱

京帝國大學博士、東京帝國大學講義師、柏園歌人、號は竹

鐘の聲さぎりに消えて天地に

いたり渡れる夜の色かな

金子薫園  
名は雄太郎。  
歌人

金子薫園

秋の風林に吹きぬ白雲の

をちかた人はおとづれもなく

なき人は御齒よわかりき蓮の葉に

もるこの飯よやはらかにせむ

鳥のかげ窓にうつらふ小春日に

木の實こぼるゝ音しづかなり

尾上柴舟

砂山を一つ越ゆればそなれ松

まばらに見えて秋の風吹く

小羊の静けき夢や守るらむ

尾上柴舟  
文學博士、東京女子高等師範學校教授、國文學者



與謝野晶子  
鐵幹氏夫人。  
文學者、歌人

牧場にひくき夕月のかけ

與謝野晶子

絹の蚊帳の波の色する透影に

松千もと見るありあけの月

三沖の汀来る牛飼男うたあれな  
のすいの可なり  
秋のみづうみあまり淋しき

二三 風と露

一 風の音

草木が風を受けて、葉枝又は莖が動いて一種の音を發したり、又風にも木の葉が飛舞ふさまなどは面白く見える。

秋の野の芒の風に戦ぎ、河邊湖邊海邊などにて、荻蘆菰などが風を受けて、ざわ／＼音のする時などは、至つて寂しい感情が起る。

秋の夕方、晴渡つた空に一點の雲もなく、またさしたる空氣の動搖もないのに、森や林の梢で何となく音がして、秋風のわたるのを知らせることがある。かの松風、松籟など云ふのもこれと同じやうなもので、別段に強い風も吹かぬに松の梢では一種の音がする。これやがて、空には多少の風のあることを示すのである。須磨明石の海邊、又は東海道五十三次の松並木などで、晴れた日の夕方、又は月の冪えた夜に、高い梢の上で松風の音のするのは、自ら一種の趣がある

須磨  
攝津國武庫郡  
にある  
明石  
播磨國明石郡  
にある

風新柳云々  
和漢朗詠集に  
ある句

八田知紀  
舊鹿兒島藩士  
仕、近衛家  
後、高香川景  
樹の弟、明  
治六年歿、  
七十五歳

昔から松風の音が吟詠の材料に上つたのも、尤もであると思はれる。

枝垂柳の風に靡く様を見ると、微風では多くの枝がそよそよと一緒に動いて、風新柳の髪を梳る。といふやうに優雅な趣がある。然るに暴風になると、恰も狂ひ騒ぐ鬼女の髪のやうに、東に舞ひ西に舞ひ南に北に舞狂ふ。又一入の壯觀である。竹藪の風を受ける工合も、多少これに似て居て、風に逆らはずに動く有様に趣味がある。歌人八田知紀はかやうに歌うてゐる。

存あらず

吹く風になびきく〜て争はぬ

こゝろや竹のみさをなるらむ

二 露の玉

露は夏草に下りるもので、朝早く起きて叢の間を見ると、葉に綺麗に着いて居る。殊に稻、蘆などのやうな禾本科の植物、又ふきやぶからしなどの葉の縁には、小さい水玉が規則正しく載つて居る。竹の葉の先にも同じやうに綺麗な露の玉が見える。

斯様に稻や竹の葉の尖端、又はふきやぶからしなどの葉の縁に着く水玉は、空気中の水分が凝集したのではなく、夜中、植物體の中に澤山に溜つた水が、葉の縁又は先にある小さい孔から外へ濾しだされて出てきたのである。植物の中から出る水は、何時でも葉の中の極つた部分に着く。葉の

全面に銀色の小さい水玉が不規則に着いて居るのは、空气中の水分から出来た眞の露である。露に逢ふと、草が如何にも涼しさうに且新鮮に見える。熱帯の沙漠のある地では、雨は降らぬが、朝露が夥しく下りるから、植物がそれで水分を取ることが出来る。すべて露は夏のさかり、晝間熱く、夜から明方にかけて、温度の急に下る時に多く出来るので、日中の熱さで萎れかゝつた葉や莖も、再びいき返つたやうになる。露は朝なく、清新の美觀を夏草に與へるばかりでなく、斯様に植物の生存上にも大切な關係があるのである。

〔三好學「植物生態美觀」に據る〕

三好學  
茨城縣の人。  
植物學者、  
帝國大學理學部教授

二四 夕陽の美

ワカク

夕陽の美は、西洋ではあらゆる美中の最も美なるもの一つとして數へられて居る。それで苟も自然の美に興味をもつて居る詩人は、口を極めてその美を歎美して居る。我が國の文學にも、夕日影とか夕映とかいふ文字は見えて居るが、其の崇高なる光景を想はしむるに足る一首、一篇だに有しないのは聊か不満足之感がある。

夕陽はすべて美しいが、中でも海の夕陽ほど美しいものがあるまい。自分は奥州の西海岸に育つたものであるから、海の日没の景色は自分の頭に牢乎たる印象を留めて居るあの夕の雲の、いろ／＼のたゞずまひ、それに映えうつれる

奥州の西  
海岸  
作者の故郷は  
羽後國鶴岡  
町

夕陽の光の濃さ淡さ、それに伴うていろ／＼に彩られる大海原、是等の一切が、日の傾くに連れて形も色もそれ／＼變つて行く有様、殊に大空の暮れてゆく色合などは、繪も筆も及ばない。

海の夕陽に對して自分の起す感情は、常に「平和」である。譬へば世界のあらゆる障礙に打勝つた大勇者が、今方に其の最後の戰鬪を後にして、榮光と平和とに擁せられつゝ、靜かに、其の墓門に凱旋するといふ様な趣がある。夕陽の景色は如何にも崇高ではあるが、其の全體の上に何處となく疲れた老衰の趣がある。朝日の景色の、活き／＼として、今將に戰場に上らんとする初陣の勇士の概あるに較べると、兩

兩相對して、さながら人生の兩極端を現示して居る趣があるのではないか。

あゝ、人、その青年時代は朝日の如く、その晩年は夕陽の如くありたいものではないか。争を経ない平和は平和とする價が無い。吾等は、一生の戰鬪に打勝ち、榮光の雲につゝ、まれて、靜かに西方の天に入りたいと思ふ。あゝ、海の夕陽は美しいが、海の夕陽に似た人生の末路は、更に一層美しくはないだらうか。

（高山林次郎「樗牛全集」）

高山林次郎  
號は樗牛。文章  
學博士。文章  
家、評論家、明  
治三十五年  
三十四歳  
歿

年たち返り  
養和元年（六  
四）

二五 空行く雁

新玉の年たち返り、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。

頼朝 時正 祐親

工藤一藤 鎌倉殿 源頼朝

一萬・箱王  
王藤家次

祐家

祐繼

祐親

祐泰

祐成(一萬)

時致(箱王)

祐經

母

名は満江。祐泰の死後、曾我に再嫁した

曾我殿

太郎祐信

工藤一藤  
即ち祐經

鎌倉殿  
源頼朝

或夕ぐれ、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は、いづくにましますぞや。往きてをがみたてまつらばや。母御前いざさせ給へ。といひければ、遙かに忘れたるこしかたも、今更おもひだされて消えいるばかり思はれて、母泣くくのたまひけるは、あの曾我殿こそおのれ等が父にてあれ。と、心強かたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王、かさねて申しけるは、父御前は、まことやらむ。狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藤とやらむに射られ死にたまひぬ。と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もあり

この里  
相模國足柄下  
郡曾我中村

とや。われらをも殺さむと思ふらむ。われらがこの里に在りと知らでや過ぐらむ。などおとなしく語りければ、母よりはじめて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの、南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、あれ見給へ、箱王殿。空を飛ぶつばさもみな、別の翼ぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫にうまれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。われ

河津殿  
祐泰

らが父をば河津殿と申してありきとかや。父たにきも世に  
 おはしまさば、馬鞍をも賜り、弓矢をも持ちて今ぞ思ふやう  
 に物を射ありきなむ。われくより幼き者にても、馬鞍弓  
 矢をもて、物を射ありくことの羨うらやましさよ。これらの事ども  
 思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはします  
 ぞや。とて、袖に顔をさし入れて、さほろめくと泣きければ、弟も  
 こりこざかかしく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房  
 これを聞きて、あななああまし。人もこそ聞け。いかに、和上  
 藤達、夜も更けぬるに、さやうにておはするぞ。とくく入  
 らせ給へ。と怖ろしげにいひければ、二人のものは門外へ逃  
 げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に内に入りけり。

あしあ  
あか

或時兄弟は、竹の小弓に薄矧うすきりの小矢を取添へて遠待とほまちに出で  
 てあそびけるが、明障子あきざしのありけるに、二人立向たつむかひひあなたこ  
 なたへ射通して、一萬箱王いちまんにやうに申しけるは、われらもいつか成  
 長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならむ  
 野山にてもあれ、親の敵祐經すけのりを、かくの如くさし合ひて射取  
 りて、とにもかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ  
 われも射習はむ。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。といひ  
 ければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろ  
 しきことかなと人々思ひけり。  
 一萬が乳母此のよしを聞知りて、大きに驚きて母にかくと  
 申しければ、母も大いに仰天おぼろし、二人の子供を呼びよせ、泣く

伊東入道  
祐親  
千鶴御前  
母は祐親の女  
松河が淵  
伊豆國田方郡  
伊東にある

石橋山  
相模國足柄下  
郡  
石橋山の戦  
治承四年八月  
二合  
土肥の杉山  
相模國足柄下  
郡土肥の山谷  
梶原景時  
頼朝の寵臣

泣く語られけるは、實か、おのれ等がさも怖ろしき謀叛を起  
さむと議しあふなるは、もし人の耳に入りなばよかるべ  
きか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴  
御前を松河が淵に沈め奉りし故に御敵となつて、先年伊東  
の館において失はれ給ひぬ。おのれ等かゝる謀叛人の孫  
なれば、敵左衛門尉上の御敵に申しなして失はるべし。そ  
の時千度百度悲しむともかなふべきか。そのうへ汝等が  
鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申してとゞまりたり。  
その故は、鎌倉殿石橋山の合戦に打負けて、土肥の杉山へ入  
らせたまひし時、梶原景時と曾我殿と、二人心をあはせて助  
け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆

返し參らせて、二人の幼き者どもを助けて給はらむと申さ  
れければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それ程の志ならば、二人の子  
供、祐信に預くるぞ。』と仰せられける故にこそ、汝等も安穩に  
て、今まで希有の命を保ちたるぞ。それにつきても、曾我殿  
の芳恩をば、生々世々にも報じ盡すべしか。鳥類、畜類にて  
も恩を知るところそ聞け。況や汝等人倫においてをや。然  
るを却つて曾我殿に歎を與へむこと、返す返すも口惜しか  
るべし。その恩を報ぜむと思はば、速かに謀叛をとゞむべ  
し。と口説きたてて誠められければ、二人の子供、目と目とを  
見あはせ、顔うち赤めて立ちにけり。  
それより後は、人の聞かぬところにては内々談議しけれど

も、人目に顯はれては語り合ふこともなし。母も内々怖ろしき者どもの心様かなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむとぞ思はれける。

二六 梅少ある友へ

軒ぶ山に垣根小川あるは梅君の—か  
もまは且形移はれお子にそへてせらるる  
うお梅などとははかどに暮らぬぞ聞えぬ  
きんられ夕は雲お日の照りて松風あつれり  
音づくと時都の宮思しめし出でらるるは  
審ふくとおもひやりすえはせむ

キケイキ

會我物語 梅少の友へ  
の物語

會我物語  
の次兄弟敵討  
不詳の著者し  
年代不明にて  
あるに流布あり  
るに代はてに

都にありしとて西遊し何時も山への  
を給ひし鄰家の理をねられけりしと慰  
めありて是よりい出立の後まは僅か  
へと入道の程も交りし事、新君への由り  
角に形移はるるが、梅君の表れをうら  
女をよめ家のつらき、あれははる梅は國  
は行けしとやうに梅君と山仰ふ程、  
その程、梅君の相物も亦おちしもの  
うら、悉く焼失せしゆき、梅君も  
懐りとせむし、梅君の煙も減り



元和假名  
高倉集  
2000

大  
義  
東山時

たうては念ふ事なり  
嬉しき日に拾得れど宿の虫は病乃  
病をうつるは思ひし頂戴の歌集  
見出でたる懐きも空しくいふ女子の  
年りくるはかきわたりも妹が例の支度ふ  
とよみ終るは一掃物の空を舞ひ見  
事ほつちいふ涙もなるといふ者人の  
喜一重に返すもわづらひと嬉し  
日あやみにあめもどく掃物も心比  
おたひしき況しはのちの事とて

をうたふは宿の虫は病乃  
しはつ日あやみの事の中出ると妹  
笑も懐きは掃物は事なりとわづらひ  
のちの事とて書きたるは終るは掃物  
記釋見しと樂しき事の次のこと  
父の心は水便りなるべき其好むは  
約きしりも其れやうの時もわづらひ  
くげふは風知るやうは心用ひらるは  
し其好む事なりとて

(樋口一葉一通信書簡文)

樋口一葉  
名は夏子、小  
説家



神まゐのまゝ  
禪讓のの  
民主

自然  
皇道  
王道  
全道

自然を變化する物  
は人道なり

さういふさゝやきがちらと私の心の上を通り過ぎた。でも、私はそのさゝやきに從ふ氣にはなれなかつた。一體、一輪挿に挿すといふ以上は、それがもはや自然のまゝでは無い。自然のまゝにといふならば、一層庭に咲かしておいた方がよい。すでに庭から剪つて來た以上、そして一輪挿に挿さうと思ひたつ以上は、どういふ風に挿したらよいかといふことは、自然問題になつて來なくてはならない。これが其のさゝやきに對する私の心の答であつた。だから私は、強ひてそのさゝやきに心を傾けることなしに、なほも桔梗の一莖をいろくくの姿に一輪挿に挿して見た斜に挿すための角度を具合ケツして見たり、右か左かへ斜にし

藝術——そのまゝの自然  
のまゝの自然  
のまゝの自然

ようとしたり、花二つ持つ莖に、もう一つ荅をつけた一本を添へて見ようかと考へたり、いろくくに思ひ惑つたのであつた。でも、それは私にとつて興味ある惑であつた。それが私には、まるで自分の藝術を表現する時の、苦しいけれども愉快な、痛いけれども快いといふあの氣持と、似たものがあることを知つた。私はちつと眼をつぶつて見た。私は白い大理石と、紫の桔梗とがお互に相寄つて、びつたりと動かないところまで頼り合つて、抱き合ひ、すがりあつて作る、其のすばらしい釣合と調和とを再び心に描いて見た。そして其の姿が、如何に

も自分の望んで居るところを十分に満たすことが出来るやうな氣がした。が、其の形は再び眼を開いた時には逃げてしまつた。崩れてしまつた。でも私は、その形を捕へなければならぬと思つた。

唯一の姿——お、さうだ。この一輪挿と、この一莖の桔梗が相寄つて作る姿には、確かに唯一のものが無くてはならぬ。どういふ風に挿しても構はないといふ氣持でやつてはならない。どうあつても、その唯一の姿を探し出さなくてはならない。

私がかう考へることは、私の氣紛れであらうか。いこちであらうか。いやさうでは無い。眞の美を見出すためには、

自分の望む、唯一の姿を探さなければならぬ。もし其れが不必要だといふなら、畫家はいろ／＼苦心する必要はない。文學者も、最も適した正確な言葉を苦心して探す必要がどこにあらうか。

たゞむやみに繪具を筆にふくませてなすりつけたり、たゞ無闇に思ひついた言葉で筆を走らせる。さうしたやり方は、表現しようとするものを十分に味ひ眺めた藝術家にとつて、餘りに樂すぎるものではないか。

私は長い間、唯一の姿を探した。これが最美のものであると、はつきり自分に向つて斷言し得るところの唯一の姿を、私は長い間、あれこれと桔梗をさしかへてゐた。一輪挿の

あかあか  
うた  
コモ  
ト  
3

よく磨かれた大理石の面には、うつすらと私の沈んだ顔がうつつた。

やがて私は、漸くのこととて、唯一の姿だと思ふものを表はすことが出来たので、思はず微笑みを洩らした。桔梗はや、左に傾いて、莖の上部を少し曲げて、葉を一つ捨てて、輕快な感じが多くなるやうに工夫された。

唯一の姿を求めて、ちれて沈んだ氣持になつた私は、まづまづ自分の満足出来る姿を探しあてて、急に晴れやかな心を取返したのであつた。

たゞ、それだけのことだ。とりたてて書くにも當らないやうな、全く或日の私の氣紛れであるかも知れない。

水谷まさる  
名は勝。文章  
家

だが、かういふ唯一の姿を探すといふ氣持について、皆さんに少しでも反省のあるものを供するなら、私のこの文を書いたことは無駄ではあるまい。  
(水谷まさる—夢と影)

二八 世界の歌枕

大西洋の浪は、太平洋のとは、稍違つてゐる。太平洋の浪は

大きくゆるく打つ。大西洋のは、いつも天氣が悪い爲か、と

にかく稍小さく鋭い。空の色の關係もあらう。其の色は

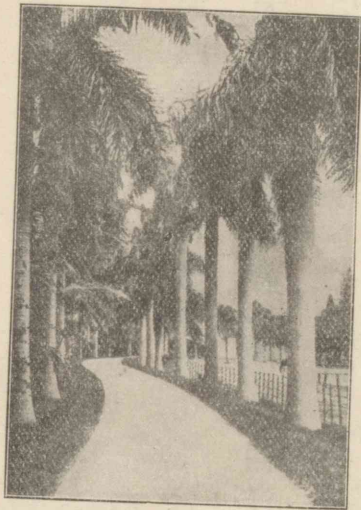
澄んだ。藍ではなくて、稍黒ずんだ時としては鉛のやうな色

に見える。大西洋も緯度稍高くなるに随つて、浪の色淡く

入日の花やかさは異ならないが、夕雲の色彩も稍あつさり

サンフランシスコ  
北米合衆國カリフォルニア州の都府ニヤ  
平洋の都府ニヤ  
最大貿易港に於ける

として、南海の絢爛な色よりも却つて美しい。  
私の大浪に遭つたのは、サンフランシスコに着く三日程前  
の一日であつた。小山の如き浪が寄返るので、さしもの大



椰子の畦

船も木の葉の様に動揺したが、幸にも此の日は頗る上天  
氣で風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味はふ事  
が出来た。大西洋の方は一體に山なす巨浪は少ないが、米國を去つて五日ばかりの一日は、暴風雨に類した天氣に出遭つた。要するに、海の景は取出でて人に語る事は難いが、一度經驗のある者が後日追

ハワイ  
北太平洋  
あつて十餘  
の島から成  
るが、今ある  
つと王國では  
北米合衆國の  
領土となつて  
る。首府はホ  
ノル

想すると、單調のやうでも其の美は千變萬化である。これ  
實に究竟の歌枕。

陸上の景色は土地に由つて著しい相違があつて、一般には  
言盡されぬ。ハワイの如き四時氣候を同じうして、太平洋  
の樂園と稱せられる地に行くと、満目の風光一變して、始め  
ての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萌黄  
の色に見えて、それに椰子の株が背景にあしらはれてゐる  
風情は、繪畫で見るよりも、實際の方がよほど美しい。これ  
からの人が、歌枕の一つとすべき所だと思ふ。カピオラニ  
の公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下枝に放し飼の孔雀  
が止つてゐて、其の艶な羽毛が花のやうであつたのを記憶

金門灣  
北米合衆國の  
西岸カリフォル  
ニアの灣入口  
の海峡。サン  
フランシスコ  
灣往來の關門

する。

又サンフランシスコの港近くなつた海の上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる所から、遙かに眺めると、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有様、水の屏風を立廻した如く、海の上にも瀧があるかとも疑はれた。是はた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。熱帯地方は云ふまでもないが、歐米の風光は日本に比して、いたく趣を異にしてゐる。かの國には、我が國よりも草木が尠ない。日本の様に松杉が全山を蔽うてゐるといふやうな山は見る事ができない。あるは芝山の如く、あるは只岩石のみの様な山の所々に、たま／＼青々した樹木が十數本繁つてゐるといふ風の景色が多い。

私は冬枯の時候にアメリカの或地方を通過したが、實に人氣のない物淋しい廣漠の野を行く心地がした。

概してあちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離れる數尺の所から、四方に向つて枝が規則正しく手を擴げてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振は、いかにも風趣が乏しいやうであるが、實際はさうでない。

さてアメリカの歌枕の一二を舉げて見よう。ワイオミングの平原は、眼の届く限り一物もなく、雪がちら／＼降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美の景には缺けてゐるが、一種壯大の趣がある。名にし負ふソルトレークの鹽の湖を中斷するルウシンの長

ワイオミング  
合衆國の西部  
にある州

ソルトレー  
ク  
合衆國ユター  
州に在る

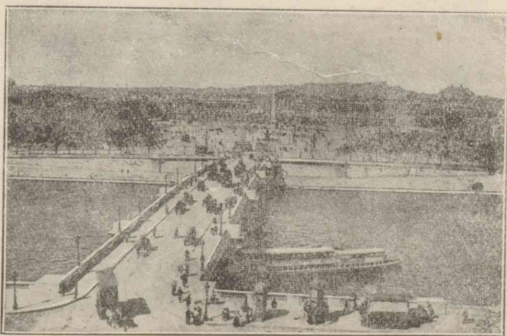




ニューイ  
ングラン  
ド  
合衆國西  
部の  
人口稠密  
なる  
一地方

シャンゼ  
ゼリ  
パリ市の  
大路

之とは反對に、冬の田舎に入つて見ると、葉は落盡した。楓樹の並木路を、雪を蹴つて小學生徒の走つて行く所などは、若き米國萬歳の聲を發した位、ニューイングランドの田舎の景色は落着いて若々しい、如何にも懐かしい感を與へる。歐米の大都會中どこが好いと問はれたなら、誰もく賞めるのはパリであらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候の溫和、風光の美、風俗の雅致ある、かういふところに住んで、詩でも詠んでゐたいとは誰も望む所と思ふ。シャンゼリゼ

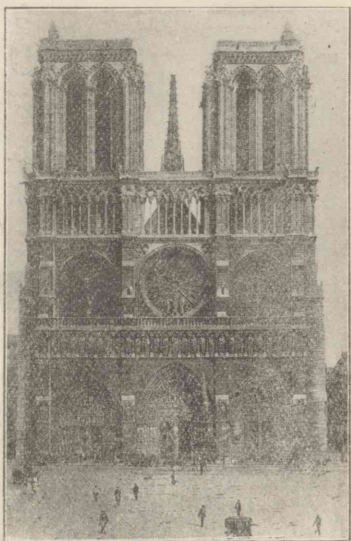


セーヌ河

長安  
支那陝西省の  
首都、今の西  
安府。周、秦、  
漢、晉、隋、唐  
皆此に都した

セーヌ河  
パリ市を貫流  
してイギリス  
海峡に注ぐ

ノートル  
ダム寺  
パリ市内の大  
ゴシック式  
歐洲にて中古  
時代に流行せ  
し一種の建築  
様式



ノートルダム寺院

の大通りは、實に長安の盛時ものかは、端麗高雅、世界第一である。歌枕はどこにもごろ／＼してゐる。文明の最高に位するのはフランスである、そしてパリである。それで又極めて華美な町中にも、何となく仙人めいた趣がある。車馬絡繹たるセーヌの河の邊りに、悠然綸を垂れた隱君子もある。河岸の石垣の上にはお馴染みの古本屋がある。其の他ノートルダム寺の建築は、ゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートル



ナポリ  
府、同名の灣  
に臨む

ザルツブル  
ヒ

オースタリヤ  
の西部、東ア  
ルプス山脈の  
北邊、山水秀  
麗の地

紅海  
アラビヤとア  
フリカとの間  
にある細長い  
海

よく、イタリヤにはナポリ邊の夢の様な景色もよい。ス  
スは風光明媚と稱せられる國で、誰も皆賞揚するが、私は寧  
ろ南ドイツを探る。南ドイツのザルツブルヒの景は、日本  
によく似てゐる。要するに、何處が一番風光が絶佳である  
かといふ問題は、一概にはきめ難い。見る人々の心によつ  
て、天下到る處如何なる處と雖も、皆相當の美は味ははれる  
ものである。浪の激しいイギリス海峽の船の上でも、暑さ  
堪へがたい紅海の甲板でも、見る心によつてそれらの美  
しさが感ぜられる。元來歌枕などと取出でてきめるのは、  
或は間違つてゐはしまいか、天下皆歌枕ではあるまいか。  
私の旅行は學術研究の爲でもなく、又特別な使命を帯びた

上田敏  
英文學者、文  
學博士、京都  
大學文學部教  
授であつた

のでも無い。たゞ漫然と飄遊したので、感覺を通して印象  
を捉へただけである。  
(上田敏「心の花」)



